

お茶の水女子大学

ピアサポート・プログラム報告書 第3号



2009年3月

お茶の水女子大学 ピアサポート・プログラム 報告書 Vol.3

目 次

1. お茶の水女子大学全学ピアサポート体制の概説－2007年度・2008年度	加賀美 常美代	1
2. 各部局の取り組み		
I 文教育学部 文教育学部活動報告（2007.4～2009.3）	安 成 英 樹	5
II 理学部 理学部活動報告（2007.4～2009.3）	吉 田 裕 亮	19
数学科	横 川 光 司	20
物理学科	奥 村 剛	22
化学科	小川温子・棚谷綾	24
生物学科	服 田 昌 之	27
情報科学科	吉 田 裕 亮	29
III 生活科学部 生活科学部活動報告（2007.4～2009.3）	藤 崎 宏 子	31
食物栄養学科	山本茂・赤松利恵	34
人間・環境科学科	太 田 裕 治	36
発達臨床心理学講座	青 木 紀久代	39
生活社会科学講座	永瀬伸子・石井クンツ昌子	43
生活文化学講座	吉村佳子・鈴木禎宏	46
IV 全学留学生 グローバル教育センター活動報告（2007年度・2008年度）	加賀美 常美代	49
留学生相談室(1)	石 原 翠	53
留学生相談室(2)	長 戸 裕 香	56
T E A (1)	木 下 あゆみ	59
T E A (2)	伊 藤 真和吏	63
3. 第1回ピアサポートのための研修と交流会	加賀美 常美代	67

お茶の水女子大学全学ピアサポート体制の概説

－2007年度・2008年度－

准教授 加賀美 常美代
(全学ピアサポート連絡会議リーダー)

1. 全学ピアサポート連絡会議の経緯と連携

2004年度から全学ピアサポート連絡会議が発足し、今年度で5年が経過した。この連絡会議は、各学部から代表される学生支援の担当教員、グローバル教育センターの留学生支援の担当教員が集まり、全学のピアサポートについて協議をすることが目的である。発足当時は、各組織が「ゆるやかな関わりと連携」を強調した。また、その理念は、それぞれの組織（学部等）の学生支援の目標、方法、支援体制など個別性、独自性を尊重する一方で、大学全体のピアサポートの共通する枠組みを融合したものをめざすことである（加賀美、2005）。

このような流れの中で、2006年度には、全学の共通の取り組みとして、はじめてのピアサポート報告会や講演会を行った。また、ピアサポート・プログラム報告書、第1号、第2号の発行を経て、徐々に個別の組織の独自性尊重を超えて、全学の取り組みを共通課題として、各学部等の代表者が意見交換し、自然に情報を共有できるようになってきた。このことが、ここ数年の全学ピアサポート体制の大きな変化であり特徴であろう。

2. 2007年度、2008年度の全学ピアサポート連絡会議

2007年度、2008年度の各学部・全学留学生担当のピアサポート委員は、文教育学部は安成英樹、生活科学部は藤崎宏子、理学部は吉田裕亮、全学留学生は加賀美常美代であった。また、ピアサポート連絡会議の参加メンバーは、上記の委員に加え、学生支援室の御船室長、戒能室長、学生支援チームの高田リーダーと田代係長により実施された。

表1のとおり、各学部等および全学のピアサポート体制の向上のため、2007年度は4回の連絡会議を実施し、各学部や講座の個別の取り組みに関する意見交換を行った。また、全学のピアサポーター研修会へ向けての企画に関する内容や意見交換を行い実施した。

2008年度は、3回の連絡会議と1回のメール会議を実施した。2007年度と同様、各学部や講座の個別の取り組み、ピアサポート・プログラム報告書第3号の編集に向けて話し合いを行った。（議事内容については田代係長からの議事報告を基に作成した。）

表1 2007年度・2008年度ピアサポート連絡会議の主な議事内容

年 月 日	議 事 内 容
2007年6月20日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・平成19年度ピアサポート事業 ・平成19年度の予算配分等
7月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウム及び講演会等の実施 ・各学部、国際教育センターの今年度取組みと記録 ・ピアサポート・プログラム報告書の増刷とHP掲載等
10月10日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアサポートセミナーの企画
12月19日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアサポートセミナーの取組 ・研修会と交流会のポスターの内容の検討 ・各部局への周知と協力依頼
2008年6月18日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・各部局のピアサポート活動報告 ・ピアサポート研修(H.20.2.14)アンケート結果 ・平成20年度のピアサポート事業活動 ・平成20年度使用経費の配分 ・ピアサポーターの育成 ・ピアサポート・プログラム報告書第3号の編集
10月1日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアサポート・プログラム報告書第3号の原稿作成、役割分担や原稿締切日の設定
2009年1月21日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアサポート・プログラム報告書第3号の原稿収集 ・2009年度に向けて活動準備等

3. 全学ピアサポート研修会の実施

2007年度には、本学のピアサポートとしてかねてから重要な課題であったピアサポートに携わる学生たちへの研修会（第1回ピアサポート研修会）を開催することにした。研修会の実際は、本報告書67ページを参照されたい。参加者は30名程度であったが、学生たちだけでなく、関係する教員や職員も参加し、はじめての全学的な取り組みとなった。交流会も行われ、多くの参加者たちが肯定的な評価をしている。

4. 今後の課題

以上のとおり、全学のピアサポートが、講演会、シンポジウム、教員・学生たちへの研修会などの企画を通して、全学の取り組みとして実体化してきているのが現状であり、こ

の5年間の大きな変化ともいえるであろう。「ピアサポートは学生による学生のサポート」であり、それを教員が支えていくという姿勢を貫くことがこれまでのお茶大のやりかたであり、確実に学内に根づいてきているのではないかと考える。今後も、学生へのピアサポートのあり方を教員と学生、学生同士でじっくり話し合いながら進めるとともに、組織間の活動における情報の共有と連携をしていくことが重要であろう。

【参考】

お茶の水女子大学 ピアサポート・プログラム報告書 第1号 2005年3月

お茶の水女子大学 ピアサポート・プログラム報告書 第2号 2007年3月

各部局の取り組み

I 文教育学部

I 文教育学部

文教育学部ピア・サポート・プログラムの取り組み 活動報告（2007年4月～2009年3月）

准教授 安 成 英 樹

（2007～2008年度 文教育学部ピアサポート・プログラム運営委員会委員長）

1. 制度の沿革

文教育学部では2003年度より、新入生が大学生活をスムーズにスタートすることができるように、ピア・サポート・プログラムを開始した。当初、このプログラムは、新入生に対するさまざまな面からの支援・サポート体制を設けることが今後ますます必要かつ有効になってくると考えた教員有志、またその趣旨に賛同してくれた上級生が自発的に名乗りを挙げて組織化されたヴォランティア的要素の強いものであった。2008年度で当プログラムは発足より6年が経過したことになる。発足当初から2007年3月まで、中国語圏言語文化コースの宮尾正樹教授（現文教育学部長）が長らく運営の中核（コーディネータ）を担われ、ついで2007年度から筆者がその任を引き継いで今日に至る。

2. プログラムの仕組み

ピア・サポート・プログラムの実行組織・実施方法は、基本的に制度発足時と大きく変化したところはない。一人の上級生（＝サポーターと呼称する）が、新入生数人（学科、年度によって異なるが、通常は4～6人）を受け持ち、これをプログラムの最小単位（P Sグループ）とする。サポーターは新入生に定期的にメール等で様子を訪ね、また直接顔を合わせる機会を設けて、新入生の疑問や相談に応える。また、対処できないような質問などには、解決しうるルートを指し示す（教員、あるいは事務諸窓口、その情報に詳しい他のサポーターなど）。

各サポーターには教員がアドバイザーとして配置されており、サポーターレベルで解決できない問題について即時、気軽に相談に乗れるようにしてある。新入生の抱える問題は、新生活への不安、大学生活への適応（とりわけ初めての時間割の自主的編成）、学内外の生活・勉学、ひいては進学、就職、将来についての漠然とした不安など多岐にわたり、特にメンタルな問題や人間関係など一サポーターが背負い込むには重すぎる問題が生じかねない。そうならないように、各アドバイザーは受け持ちのサポーターおよびP Sグループの現状を適切に把握しておく必要がある。こうしたサポーターおよびアドバイザー

の調整者、総括責任者として、コーディネータがおかれる（2007年3月まで宮尾教授、以降は筆者）。

また、文教育学部内には各学科から1名ずつ選出された運営委員で構成されるピア・サポート・プログラム運営委員会が組織され、当該委員会がピア・サポートの運営に責任を持つ。コーディネータと運営委員長はこれを兼務するのが慣例となっている。

3. ピア・サポート活動の実際

文教育学部のピア・サポート・プログラムは、新入生に対する新生活支援、トータルケアを図るという本来の主旨からして、主たる活動期間を4月中と限定し、入学式からの3週間に持てる力のほとんどを投入するかたちで活動してきた。とくに授業開始から、ゴールデンウィークに入るまでの2週間余がピア・サポート活動の核をなしており、この間サポーターは受け持ちの新入生と密にメールでやりとりをしたり、昼休みに直接会って相談に乗ったりといった活動を展開する。サポーターについては、制度発足当初は主として学生からの志願者をもってこれに充てたが、その後必要なサポーター数を充足するため、また人員のバランス等を考慮して、各学科ごとに割当人数をおおよそ決め、各コースにさらに人数を割り振って選出する形式となっている。前年度の1月末までに、各コースでサポーターを選出、コーディネータに情報を集約しておく。4月、新入生の名簿が確定すると、コーディネータは各コース選出のサポーターに新入生を数人ずつ機械的に割り付けて当該年度のPSグループを確定する。他方、入学式直前に学部のサポーター全員を招集し、ピア・サポートに関するガイダンスを実施する。2時間程度で、サポーターとしてなすべきこと、してはならないこと、等を具体的事例に即して挙げながら説明し、サポーターからの質問を受ける。入学式からその後のガイダンスまでのあいだで、サポーターとその受け持ちの一年生との顔合わせを行い、サポートを開始する。なお、4月中（慣例では金曜日の夕刻）にはピア・サポート・プログラム主催の懇親会を行うのが慣例となっている。

ゴールデンウィーク明けからは徐々に活動を縮小させ、新入生からの質問に適宜対応するといった程度になる。サポーターには、週に一回程度メールで様子を聞くように依頼しているが、どの程度のリアクション（需要）があるかは不明である。なお、7月上旬に文教育学部1年生全員に対して、ピア・サポート・プログラムの実施状況や意見を聞くためのアンケート調査を実施している（アンケート結果については後述）。

なお、具体的な活動日程は以下の通り。

2007年度	1月末日までにサポーター選出
	4月5日(木) サポーター研修会(文1-302)
	4月6日(金) 入学式(10日までにサポーターとの顔合わせ)
	4月12日(木)～ サポート開始

- 2008年度
- 4月13日(金) 懇親会(文教第一会議室)
 - 1月末日までにサポーター選出
 - 4月4日(金) サポーター研修会(文1-302)
 - 4月7日(月) 入学式(10日までにサポーターとの顔合わせ)
 - 4月14日(月)～ サポート開始
 - 4月18日(金) 懇親会(文教第一会議室、下記写真参照)



4. 評価、問題点、課題

本プログラムは開始から丸6年がすぎ、少なくとも制度として学生・教員からともに十分に認知され、また一定の役回りを果たしてきたことは確かである。しかしながら、2007年度、2008年度と2年間にわたり、実際にサポートを受けた1年生に対してアンケート調査を行ったが、そこからは本プログラムが多様な問題を抱えていること、そしてその大半は未だ未解決であることが浮き彫りになっている。以下、適宜2008年度版のアンケート結果を踏まえながら、問題点を指摘したい(集計結果の詳細は章末参照)。

第一に、ピア・サポート・プログラムの存在自体は十分認知され、また評価されているように思われる。新入生が受けたサポートについては、メールでのやりとりが平均1.2回、直接会ってサポートされた回数も平均値として1.1回を数える。また、2008年度の懇親会には、新入生の半数を超える115名が参加している(アンケート問(1))。また、ピア・サポートという試み自体についてはおおむね好意的であり、履修相談、時間割の組み方などに適切な助言が得られたとする意見が多く、「大いに役に立った」「少し役に立った」をあわせれば、134名(66%)が好意的評価を下している。また、来年以降どうプログラムを実施すべきかについても、「是非実施すべき」「実施した方がよい」をあわせて143名(70%)が肯定的評価をしていることがわかる(問(2)、(3)、(4))。

しかしながら、アンケートの各コメントを詳細に見ていくと（問(5)）、多くの問題点が浮かび上がる。まず、全くサポートを受けられなかったという学生がかなり存在する（33名）。新入生の側でサポートを必要とせず、サポーターと連絡を取らないケースもあると考えられるが、他方おそらく全く活動しなかったサポーターが若干名いたことが推測され、しかもこのアンケートで判明するまで、コーディネータには全く実態がつかめないままであった。それ以外にも、サポーターが熱心でないこと、十分にサポートしていないという不満も散見される。

この問題はピア・サポートの構造的な欠陥を露呈している。本来この制度は、やる気のある学生がサポーターになることを前提にして成り立っており、こうしたボランティアな気質が絶対的に不可欠であった。ところが実際には、制度を整えるという名目で、自発的な立候補ではなく各コースごとに何人、と割り当てられた人数を「選出」する方法（イニシアティブは学生ではなく教員にある）に変質していったこと、したがってサポーターを引き受けた学生も「自発的」にこのプログラムにコミットしようという意識がややもすれば希薄なこと、またアドヴァイザー（教員）も最初は有志的、自発的に引き受けていたものが、機械的にその年の学年担当が担当するなど、（全学的な規模で）制度化され整備されればされるほど、本来の趣旨、精神的根幹部分が劣化しつつあることは揺るぎない事実である。結果として、ごく少数の教員をのぞけば、自分がアドヴァイザーであるのかどうか、何人のサポーターを抱えているのか、などについてほとんど自覚のない場合も多いと考えられる。急速に研究教育面での多忙さがいや増し、誰もが時間的・精神的余裕を失いつつある現状において、こうした制度自体の形骸化、空洞化をいかに防ぎ、血の通ったプログラムとして維持・拡充していくかが今後のもっとも大きな、そして困難な課題である。

サポーターについても、その学生の適性よりは教員の個人的な人脈（すなわち頼みやすさ）で、「動員」されているきらいがあり、これではサポーターの質を保つことはどうも困難である。また、サポーター自体の資質という難しい問題がある。正直に言って、誰もがサポーターに適任とはいえないのであり、一定レベルの責任感、几帳面さ、面倒見の良さ、バランス感覚等が必要なのであるが、実際にはこれらの資質を検証した上でサポーターを選任しているとは言い難いものがある。また当然、ある程度のサポーター養成なり研修なりの仕組みが必要ではあるが、実際には直前の研修会を実施するくらいしか対応策が取れないでいる。

他方、サポートを受ける新入生の側を見ると、頻繁にサポーターに相談する学生も見られるが、少々度を越した頻度で質問をする学生の事例も見られたようである。新入生にとってピア・サポートは便利使いのできる仕組みかもしれないが、サポーター自身ヴォランティアであることを考えると、過度の質問（しかも深夜、早朝の非常識なコンタクト）をどう防止するかも今後検討課題になっていくかもしれない。新入生、サポーターともに、「大人の」関係をどうやって構築させうるかが今後重要になってくるであろう。

また、新入生側の不満として、進学を希望するコースのサポーターに担当してもらえず、知りたい情報が得られなかったというものが多い。この点はここ数年絶えず問題となっているのだが、学科枠で入学し2年進学時に専門コースを選択するという文教育学部の現在の進学システム上、当人が希望するコースのサポーターを（希望を聞いた上で）割り付けることは、技術上ほとんど不可能である（希望を聞いてP Sグループ割り付けをする時間は事実上とれない）。今年度は、直属のサポーターとは別に、進学希望先のサポーターの連絡先を新入生に知らせ、進学についてはそちらに相談するように手配したが、さほどの効果は上がらなかったようである。今後とも、新入生の希望に添ったかたちでのP Sグループ構成の方法についてはさまざまに検討していくべきであろう。

また、文教育学部の場合ピア・サポートの活動が、現在のところ4月中に限られている点も今後の課題であろう。現在の人的資源ではこれで手一杯ではあるが、せっかくの新しい人的ネットワークが毎年霧消してしまうのはいかにも惜しい。5月以降、こうしたネットワークを生かして新入生およびサポーターに益する企画、取り組みを設定できれば理想的である。なお、筆者の属する比較歴史学コースでは、2008年1月、2009年1月にそれぞれピア・サポート協賛というかたちで、就職が内定した4年生数名に就職のノウハウを語ってもらうという就職ガイダンスを実施した。アンケート（問(6)）からもわかるようにこうした企画に対する1年生の希望は強くあるので、類似の催しを積極的に設定していく努力も必要であろう。

最後にもう一点、ピア・サポートには自由になる財源が全くない。一方、4月の懇親会など多少なりとも経費のかかる部分は存在する。本プログラムは基本的にヴォランティア精神を根幹とする制度であるといっても、掛かるものは掛かるのであり、柔軟な財政的支援システムが必要なのではないか。



比較歴史学コース主催就職ガイダンス（2008年1月11日）

2008年度ピア・サポート・新入生アンケート調査集計

2008年度入学生を対象に、2008年7月上旬実施（必修科目「情報処理演習」中に実施を依頼）
有効回答数は203名分（人文62、言文83、人社42、芸術16）

(1) サポーターから受けたサポートについて

【メール】	0回	55名	【直接面談】	0回	63名
	1回	33名		1回	59名
	1～2回	4名		1～2回	2名
	2回	42名		2回	48名
	2～3回	6名		2～3回	4名
	3回	26名		3回	16名
	3～4名	1名		4回	4名
	4回	10名		5回	3名
	4～5名	1名		10回	1名
	5回	12名			
	10回	9名			
	50回	1名			
【懇親会参加】	参加	115名			

【その他の活動】

人文：時間割の相談にのってもらいました。	言文：お昼ごはんを食べながら相談
人文：お昼を一緒に食べた	言文：一緒にお昼を食べて時間割を見てもらった
人文：時間割を見てもらった。	言文：教室で食事
人文：時間割について相談会を開いていただいた	言文：時間割を見てもらった
人文：時間割を見てもらいました。先生のお部屋でお菓子をたべました。	言文：ピアの先輩と一緒に昼を食べた
人文：担当のサポーターとは一度しか会ったことないです（顔あわせで）	人社：コース、時間割の組み方など
人文：研究室にて相談会。	人社：時間割を見てアドバイスをもらった。
人文：先生のお部屋にお呼ばれしてお昼ごはん	人社：4. 18にピアサポートの方が来なかった ので、サポートを受けられなかった。
人文：先生のお部屋で弁当を食べました。	人社：休日に学食に集まって時間割りの組み方を教えてもらった。
人文：お昼に先生の研究室でごはん会	人社：時間割りを確認してもらった。
言文：自己紹介	人社：時間割りの相談
言文：時間割の作り方について	人社：サポーターと会ったこともないし、連絡 もありませんでした。
言文：時間割作成に関するアドバイスをしても らった	人社：時間割りに関する相談会みたいなもの をしていただいた。
言文：昼食をとりながら時間割について相談	

人社：他のピアサポートの先輩が教えてくれた。してもらいました。
人社：時間割を見てもらい、アドバイスなど

(2) ピア・サポートは役に立ったか？

- | | | | |
|----------------|-----|-------------------|-----|
| (a) とても役に立った | 59名 | (b) 少し役に立った | 75名 |
| (c) どちらともいえない | 18名 | (d) あまり役に立たなかった | 11名 |
| (e) 全く役に立たなかった | 7名 | (f) サポートを全く受けなかった | 33名 |

(3) 来年以降のピア・サポートについて

- | | |
|---------------|-----------|
| (a) 是非実施すべき | 48名 |
| (b) 実施した方がよい | 93名 |
| (c) どちらともいえない | 54名 |
| (d) 実施しなくてよい | 6名（無回答2名） |

(4) ピア・サポートでよかったこと（119名回答）

人文：どれくらいクラスを取るべきかきけたこと。人文：シラバスの見方はもちろん、学校生活のことも話せてよかった。

人文：履修を決めるのにととても親切に相談にのってくれた。人文：興味がある専攻について、気軽に聞いた。

人文：履修のこと、全くしくみが分からなかったけど、相談して何となく分かった。人文：先輩に確かな情報をいただけた。

人文：カリキュラムの組み方の相談など、諸相談。人文：授業の組み方や単位の数え方が分かりやすかった。

人文：シラバスだけでは分からないような、授業の情報を入手できること。人文：授業時間割を見てもらい、アドバイスをもらった。

人文：履修登録の際に、どのようにすれば良いのかを教えてもらい、役に立ちました。人文：時間割の作成にとっても役立ちました。

人文：時間割を見てもらって、この教科はどうかとか取り方がどうだとか教えてもらえて良かった。人文：授業の組み立て方や内容

人文：授業を履修するときに相談にのってもらえたこと。人文：分からなかったら安心して聞けるという相手がいること

人文：時間割のチェックをしてもらったこと。人文：知り合いが全くいない&学校の説明がとぼしい中で助かった。

人文：時間割を見てもらってアドバイスしてもらった。人文：初めて自分で時間割を組む不安が軽減された。

人文：ピアサポートというプログラムがあったことで何かあったら質問できる、という意識を持っていたことは大きいと思います。人文：担当のサポーターではない人にお世話になりました！先生のお部屋にも連れて行ってもらえた。

人文：授業の組み方を教えてもらえたから。人文：時間割の相談

人文：懇親会で人文の子と仲良くなれたのが良かった。人文：懇親会で人文の子と仲良くなれたのが良かった

人文：大学のことが何も分からなかったのですが、安心して大学に行けた。

人文：履修のし方がよく分からなかったのでできてよかったです。

人文：新入生の中で早くに友人がつくれた。授業やテストがどんなものか知ることができた。

人文：履修について先輩のお話を聞くことができました。

人文：教職をとるかどうか迷っているときにすごくいいアドバイスをもらった。あと先輩が身近に感じて安心した。

人文：履修相談ができたこと。

人文：先輩が時間割を作るときの相談にととても丁寧に答えてくださったこと。

人文：履修についての相談が出来たこと

人文：誰かに相談できるという安心感があった。

人文：授業を組む際の相談できたこと。

人文：先輩に時間割を見てもらえたこと。

人文：とりあえず同じ学科の先輩の連絡先を確保できたこと。夏休みの予定の立て方の相談に乗ってもらえたこと。

言文：質問が気軽にできて非常に助かった

言文：授業のとりかたを相談出来てよかった

言文：時間割の組み方でよく分からない点を聞くことが出来たこと

言文：友達が増えた

言文：学校の方だけでは説明不足と感ずるところをサポートしてくれた

言文：カリキュラム組みをととても助けていただきました。

言文：学生課の人に質問するときはちゃんと質問を考えてからじゃないとキレられると教えてくれたこと。怖かったです。

言文：時間割の立て方についてアドバイスいただいたこと

言文：時間割を見てもらえたこと

言文：時間割や授業の様子がわかった

言文：先輩と少し仲良くなれたこと

言文：教職の時間割がよく分からなくて先輩に見てもらいました。

言文：先輩から話が聞けるというのは入学したばかりのころはととてもありがたかったです。時間割など特に。

言文：時間割を決める相談相手がいたこと。同じピアサポートの先輩について人と話すきっかけができたこと。

言文：時間割だけでなく、サークルについても相談できたこと。

言文：授業時間割の組み立て方が分からなくて教えてもらったこと

言文：時間割の組み方が全く分からなかったので、時間割を見てもらえたこと。

言文：はじめは時間割の立て方が全く分からなかったのもメールでピアの先輩に聞いたのがよかった。

言文：時間割の組み方を丁寧に相談にのってもらえた。

言文：何も分からず不安な時に、いろいろ教えてくれる人がいてとても心強かった。メールで履修方法やコツを教えてもらって、先生に聞くより役に立った。

言文：4月の大学生活が右も左も分からない時に、頼れる先輩がいるのは心理的にも安心する。コース選択についての話を聞いた。

言文：4月当初知り合いの先輩がいなかったもので、分からないことを質問できてよかったです。

言文：時間割をくむべき時に相談にのってくれてとても助かった。

言文：メールで分からないことを気軽に聞けること

言文：メールで好きな時間に質問できたこと。

言文：それぞれの授業の内容を生徒の視点から教えていただけたこと。勉強だけでなく大学生活の相談事も聞いていただけたこと。

言文：初めて組み立てる時間割に不安があったが、やさしい先輩に見てもらったり、アドバイスしてもらえたことで不安が解消したこと。

言文：時間割の相談に乗ってもらえたこと。

言文：今のところというと、別に役に立ったことはないです。自分からもサポーターに聞いたり助けを求めたことはないですけど、サポーターからもあまり的ではなかったと思います。

言文：授業のとり方とかが全く分からなかった
ので、ピアサポートの先輩にいろいろ聞いて
良かった。

言文：時間割の相談ができること

言文：時間割についてのアドバイスをいただけ
たこと

言文：時間割の組み方について相談できたこと

言文：この授業は面白いよ、などと授業の様子
を教えてくれた

言文：気軽に質問できるのがいい

言文：履修登録のことなどでいろいろ教えても
らえたこと

言文：授業など学校生活での不安が取り除かれ
た

言文：時間割の組み方

言文：時間割を見てもらえたのはよかった

言文：自分のサポーターが自分の目指すコース
の方でなくても、そのコースの先輩を紹介し
てもらえること

言文：授業の組み方で不安なところを教えても
らえたこと

言文：時間割など、友達と相談してもどうしよ
うもないようなことを聞けたりしてすごく助
かった。

言文：時間割の組み方を丁寧に教えてもらえた
ので、無事に授業を履修出来ました。

言文：授業の組み立て方が全く分からなかった
とき、アドバイスをくれてうれしかった。

言文：授業のとり方に不安があったので、確認
してもらって安心した。

言文：何コマとるべきかの目安がわかったこと

言文：何でも気兼ねなく聞けるところ。履修に
ついて全然分からなかったのでとてもためにな
った

言文：履修の仕方や授業のコマ数の目安などわ
からないことばかりだったけれど丁寧に教え
てもらえたこと

言文：入学したばかりでいろいろと不安だった
時に授業のとり方などについて教えてくれたり、
作った時間割を見てくれたり、質問に答
えてくれたりととても心強かったこと。

言文：何単位くらいとればいいのか、テストは
どんな感じなのか、まったく何も分からない
状態だったので、話を聞いて安心できた。

言文：懇親会で自分の行きたい学科の先輩のア
ドバイスが受けられてよかった

言文：時間割を見てもらった

言文：履修システムの疑問点を聞けたこと

言文：履修相談に乗ってもらえたのがよかった
です。

言文：少しだけだったけど、大学のことを聞け
たこと

言文：バイトの話とか聞けたこと

言文：履修のとり方がわかってよかった

言文：4月にいろんな資料をもらって、ピアサ
ポートの先輩に「これはとっておいたほうが
いい」と教えてもらってよかった。

言文：大学生活の一例を知れたこと

人社：時間割を組む際お手伝いしていただいた。

人社：何も分からない中、先輩に話をきくこと
ができて心強かった。

人社：各コースの内容より詳しく聞けたこと。

人社：時間割を見てもらえた。コースの話が聞
けた。

人社：時間割を組むとき全く分からなかったの
ですが、たくさん相談ができました。

人社：ピアサポートの方が本当にいい方で、寮
のこととか他の生活のこともきけてすごくよ
かったです。

人社：入学時は不安が多かったので、ピアサポ
ートの方がいる！という事実が安心につなが
った。

人社：履修の仕方を教えてくれたこと。

人社：授業についてまったくよくわからない状
態のときに、授業について色々教えてもらえ
たのはよかった。

人社：最初で時間割りの組み方などが全くわか
らなかったのでアドバイスをもらえてよかつ
た。

人社：不安を聞いてもらったり、時間割りを見
てもらえたこと。

人社：特にやりとりをしなかったのでなんとも

いけない。

人社：質問に行きにくいので、質問できる場をもうけてもらえてよかった。

人社：時間割りを決める際に相談にのっていただいたこと。

人社：分からないことが聞けたり、他の先輩を紹介してもらえたりした。

人社：進学したいコースにいる方だったので、授業の選び方を詳しく教えてもらえて良かった。

人社：時間割りに関する相談会をやるということを知らせてくれたこと。

人社：授業の時間割りを組むとき、不安なことだらけだったので、一緒に考えてもらえてよかった！21単位とろうとしていて、本当にとっていたら今ごろ死んでいたと思う。

人社：授業に関する知らないことを教えてくれた

人社：時間割りの組み立ての際のアドバイス

人社：履修計画を見てもらえて助かった。

人社：時間割りに関してアドバイスをもらえてよかったです。

芸術：直接教えてもらえた

(5) ピア・サポートの課題、問題点 (56名回答)

人文：他のピアグループの人たちは教授の部屋へつれていってもらったらしく、少しくらいやましかったです。

人文：はじめに上級生からメールをいただけると、1年生の相談がしやすいかもしれません。

人文：担当の人の所属先が自分の希望先と違う。(選べないところ) LAなど新規のプログラムについては聞けなかった。

人文：人によっての差がある

人文：サポーターによって大きな差があった。

人文：正直、先輩一人だけのアドレスを聞いても、質問しづらいとおもってしまった。4月は忙しく、なかなか交流に参加するのは難しかったです。コースによって、一年の働きかけによっては全く機能しない。少なくとも1回、全員参加で進みたいコースとの交流会を開いて欲しい。

人文：昼食の時、ピアサポーター同士が喋っていて居づらかった。

人文：実際個人的に会ったりしなかったので顔合わせ1回位は集めてくれるといい。特に履修等分りにくかった。

人文：サポーターにより、サポートの頻度が違うところ。

人文：学生課に聞いた方が正確な気がしたので、利用しませんでした。

人文：具体的に先輩の時間割等を見せていただ

けたら、もっとイメージがわいたかなあ、と思います。

言文：自分の行きたい学科の先輩ができるだけ担当の方が安心です

言文：聞きにくい。サークルの先輩のほうが聞きやすい。入学したてでは何を聞けばいいのかさえわからない。

言文：希望進学コースの先輩に話をきいたらもっとよかった。

言文：専攻する言語が違うとあまり意味がない。

言文：時間割の相談に乗ってもらったが、コースがちがうと時間割もかなり変わってくるので、それほど細かくアドバイスしてもらうことができなかった。逆に英文に進みたい子で、英文の先輩にあたった子は役に立ったといっていた。どうにかコースごとに割り振ることはできないのでしょうか。

言文：時間割が決まってしまうと全く接触がなくなったので、うーんと思いました。こちら何も言いませんでしたが。

言文：本音を言うと、もう少し時間割を作る時に親身になってほしかった。作るの失敗しました。

言文：進路(専攻)が違うので、科目のとり方や相談をしてもあまり意味がなかった。

言文：自分の進みたいと思っているコースの人のなしを聞いたかった。

言文：連絡しにくい。もっと先生との連携がほしい。

言文：私の担当をしてくれた先輩はとても丁寧だったのですが、友達の中には何も教えてくれない先輩が担当だった子もいたようです。お忙しいことは承知ですが、仕事を引き受けたからにはきちんとすべきことはしてほしいです。

言文：サポーターの個人に任せるのではなく、活動に対して何かルールを決めた方がいいと思います。

言文：もう少し深く交流したかった

言文：先輩によって活動に差がある

言文：自分の目指すコースのサポーターについてもらえるか分からない点

言文：もう一回くらい一緒にお話をする機会が欲しかった

言文：私はすごく相談に乗ってもらって助かったけど、友達のピアサポーターの方は全然誘ってくれなかったらしいので、ピアサポーター同士の連絡も必要だと思う。

言文：私は、自分のピアの先輩とはあまり連絡をとることが出来ず(多忙なため)、友人のピアの先輩にいろいろとお世話になってしまいました。お忙しい先輩にはこちらも相談しにくいので、時間に余裕のある方をお願いしたい。

言文：現在は特にアドバイスを受けることはないが、授業が一緒のときこえをかけてくれる。

言文：今年はリベラルアーツについて、ピアサポートの人は分からなかったのが足りなかった

言文：自分が進学したいコースの先輩と話す機会がもっと欲しかった。

言文：消極的な人でも参加(相談)しやすいようにしてほしい

言文：相談していいのか、はっきり分からなくてメールでの相談などできませんでした。

言文：サポーターとの面談も最初の決められた1回のみだったし、本当に新生をサポートする気があるのなら、定期的にやったり、1

対1で項目ごとに質問したり、積極的に活動した方がよい。

人社：試験の過去問を貸していただきたい。

人社：「こんなつまらないことをきいても大丈夫カナ・・・？」というようなつまらないことも分からない新生。気軽にきける体制を作って欲しい。

人社：四月に接触があったり全く関わりがない点。

人社：ただ、負担になっていないかは心配です。

人社：ピアサポートを受けられなかったのもっとちゃんとプログラムを組んだ方がよいと思います。

人社：私の担当の人ではなかったが、あまり積極的でない人がピアサポートになっていた年の一年はかわいそうだった。

人社：顔合わせの時担当の人がいなかったのもサポートを受けられませんでした。

人社：自分のすすみたいコースや似た授業をとっている人の方がいい。

人社：1回も会わなかったです。いらっしやらなかった・・・。みんなはサポートしてもらっていたのに、残念でした。

人社：懇親会には参加してほしい

人社：きちんとサポートをしてくれる人とそうでない人もいるようで、格差(と言ったら言い過ぎかと思いますが)をどうにかしてほしい。

人社：一ヶ月くらいすぎると接点がなくなること。

人社：コースの違う先輩は聞きたいことが聞けなかったりしたので、サポートをする先輩を増やして欲しい。(できればすべてのコースを網羅する形で)

人社：あまり学内で会うことがない点。

人社：1回目の顔合わせの時にピアサポーターの方が欠席されていたので、上手く活用できなかった、

人社：ピアサポートの方と全く接点がありませんでした。グループによって、だいぶサポート内容に差があると思います。

人社：教育に進むつもりなのですが、私は心理

の方だったので、もし自分の希望の学科の先輩だったら、さらに良かったかなとは思いません。

人社：あまり積極性がないと思う。

人社：ピアサポートの方に一度も会えなかった。困りました。懇親会など色々参加したけど、

頼れる特定の方がいなかったの、そういう方にはピアサポーターをやってほしくないと思いました。

芸術：知らなかった

芸術：存在感なし

(6) ピア・サポートで行ってほしい催し (55名回答)

人文：2年のコース分けの前に何かイベントをすれば良いのでは

人文：卒業生or内定者に話を聞く

人文：内定した4年生に、就活の話を聞かせてもらいたい。(何月から始めた、何勝何敗など)

人文：進学希望先の上級生との懇談。是非。すべてのコースの方とはなしたいです。

人文：進学希望先の上級生との懇談

人文：例えば以降に書かれている内容(上級生との相談、就職した卒業生等の話を聞く

人文：進学希望先の上級生との懇談

人文：進学希望先上級生と懇談、就職した卒業生等の話を聞く

人文：進学希望の上級生との懇談会

人文：懇談会などですべてのコースの先輩方がいらっやると参考になって良かったです。

人文：一月頃に進むコースを決めるとき、やっぱり少し不安なので相談できるとよい

人文：進学希望先の上級生との懇談

人文：就職相談など。

人文：就職先の話はしてもいいと思う。

人文：進学希望先の上級生との懇談

人文：進学希望先の上級生、就職した卒業生等に話を聞く

言文：進学、就職希望先の先輩の話は聞けたら非常に参考になると思う

言文：就職した卒業生に話を聞くのはやってほしい

言文：進学希望先の上級生との懇談

言文：就職した卒業生に話を聞く

言文：内定した4年生の話を聞きたい

言文：内定した4年生に話を聞く

言文：コース別に先輩との企画

言文：テスト期間前相談とか？

言文：進学希望先の上級生との懇談

言文：2、3、4年生のいろいろな立場にいる人としゃべる機会をもてたらいいと思う。

言文：進学希望先の先輩の話をもっと聞きたかった。

言文：進学希望先のコースの上級生が1年生の頃にどう過ごしたか教えてほしいです。

言文：進学、就職関係の話を聞くのは興味がある。

言文：就職した卒業生または内定した4年生に話を聞く

言文：就活について詳しくはなしを聞ける場があればよいと思う。

言文：例に挙げられたものも開催してほしい。また寮でもそのようなサポーターをつけてほしい。

言文：上級生が具体的にどんな勉強しているのか、先輩の本音トークを聞きたい。就職した卒業生または内定した4年生に話を聞く。

言文：就職した卒業生または内定した4年生に話を聞く

言文：自分が気になっているコースの先輩とのふれあい会。(授業や学習スタイル、進路について話を聞きたい)

言文：卒業生や進路に関してのイベントがあったら良いと思います。

言文：内定した4年生には話を聞いてみたい。

言文：進学希望コースの先輩がピアサポートについてほしいです

言文：テスト対策

言文：就職した卒業生などに展望など聞きたい。

言文：進学希望先の上級生との懇談

言文：例みたいなのがあればいいと思います。	人社：就職のことなどについての機会があればいいと思う。
言文：進学志望先の上級生との懇談	人社：内定した4年生や大学院に進学した先輩の話はきいてみたい。
言文：進学志望先の上級生との懇談	人社：進学志望コースの先輩との懇談
人社：上級生・卒業生との懇談など	人社：就職した卒業生、内定者に話を聞く
人社：上級生・卒業生との懇談など	人社：先輩の話聞く機会を増やしてほしいです。
人社：公務員試験や就職活動	芸術：宣伝
人社：自分が進みたいと思っているコースの先輩と懇談会を開く。	
人社：就職についてのアドバイス会	

(7) 来年、あなたはサポーターをやってみたい（やってもいい）ですか？

- | | |
|---------------|------------|
| (a) はい | 9名 |
| (b) 頼まれればOK | 74名 |
| (c) あまり気乗りしない | 75名 |
| (d) いや | 39名（無回答6名） |

(アンケートの質問項目)

2008年度ピアサポートプログラム 新入生アンケート

学科名 _____

- (1) あなたがサポーター(上級生)から受けたピアサポートの回数や内容をできるだけ詳しく教えてください。
- | | |
|------------------------|-------------------------------|
| 【メールでのやりとり】 | 回くらい |
| 【サポーターと実際に顔を合わせて相談】 | 回くらい |
| 【4/18夕方の懇親会】 | 参加した 参加しなかった (どちらかに○をつけてください) |
| 【その他：活動内容を具体的にお書きください】 | |
- (2) ピアサポートプログラムは役に立ちましたか？ (○をつけてください)
- | | | |
|-------------------|----------------|---------------|
| (a) とても役に立った | (b) 少し役に立った | (c) どちらともいえない |
| (d) あまり役に立たなかった | (e) 全く役に立たなかった | |
| (f) サポートを全く受けなかった | | |
- (3) 来年以降もこのサポートプログラムを実施した方がいいと思いますか？
- | | |
|---------------------------|--------------|
| (a) 是非実施すべき | (b) 実施した方がよい |
| (c) どちらともいえない | (d) 実施しなくてよい |
| (d)を選んだ場合のみ、その理由： _____) | |
- (4) 4月からのピアサポートで、役に立ったことや良かったことはなんですか。自由にお書きください。
- (5) 現在のピアサポートの足りないところ、改善して欲しい点などを自由にお書きください。
- (6) ピアサポートプログラムの中で、これからやって欲しいイベントや企画などのアイデアを、思いつく範囲でご提案ください。(例えば、進学志望先の上級生との懇談、就職した卒業生or内定した4年生に話を聞く、等)
- (7) 来年、あなたはサポーターをやってみたい（やってもいい）ですか？
- | | | | |
|--------|-------------|---------------|--------|
| (a) はい | (b) 頼まれればOK | (c) あまり気乗りしない | (d) いや |
|--------|-------------|---------------|--------|

II 理 学 部

Ⅱ 理学部

理学部の学生支援の現状

教授 吉田裕亮

理学部では平成16年度より各学科に、学生支援担当教員を配置し、必要に応じて会合し、各学科での学生支援活動の情報交換を図る体制を整えた。今回の本冊子でも前回と同様に、理学部各学科での学生支援の取り組みの現状を取りまとめることにより、理学部各学科および全学的な学生支援の取り組みの現況に関する情報等を共有し、理学部における今後の学生支援の活動に資すことにしたい。

理学部の全学科が全学共通の体制である学年担当教員の配置を行なっているのは、もちろんである。また、理系の特徴でもあるが、全学科で研究室体制を取っているため、4年生以上の学年に対しては、指導教員による学生支援はもちろんのこと、上級生から下級生、あるいは同級生の間での学生相互の、いわゆるピアサポートも実質的に従前から行なわれている。最近では3年生以下の学年に対しても各学科での独自の修学や大学生活に関する学生支援の取り組みが見られるようになってきた。このような現状や新たな取り組みを報告書としてまとめることにより、学科間相互で参考とすることで、今後の学生支援活動の充実を図りたい。

以下に、理学部5学科（数学科、物理学科、化学科、生物学科、情報科学科）の学生支援の体制の現況と平成19年度、平成20年度体制と具体的な取り組みに大別してまとめた。

数学科における学生支援の現状

教授 横川 光 司

1) 学生支援体制

● 学年担当教員

学年担当教員制であるが、各学年に教員を補導教員として1人ずつ割り振り、その学年の言わば担任の役割を果たしている。補導教員は1年任期である、学生側から見て、なるべく多くの教員を補導教員と出来るように毎年割り振りを変更している。また、就職・卒業の年である4年生に対しては、学科長が補導教員を担当することになっている。

● スーパーヴァイザー制

数学科では1998年度からスーパーヴァイザー制を導入した。この制度は、1年生から3年生までの各学年において、学生2人ずつに1人の教員をスーパーヴァイザーとして割り振って、きめの細かい支援を行うものである。(各学生に対するスーパーヴァイザーは入学式の日に表示され、3年間変わらない。また、学年の人数によっては、例外的に1人の教員に3人の学生が付くことがある。)4年生になれば、学生は数人ずつに分かれてそれぞれ1人の教員を指導教員として、きめ細かな指導を受けることになるが、入学から4年生になるまでの間は、補導教員の存在だけでは、4年生に対して指導教員が行うような学生支援は受けられない。そこで考えたのが、このスーパーヴァイザー制である。スーパーヴァイザーとしてどのような学生支援を行うかは、各教員に任されており、何か問題が起きたときに適切な対応をするほか、例えば、各種相談に応じたり、学生の要望に応じて自主ゼミの支援をしたりしている。これは少人数教育の利点をフルに活かしたものといえる。

2) 学生支援行事

● 新入生懇談会(4月)

4月の入学式後に、新1年生、編入学生および教員との顔合わせ、学生による自己紹介および教員からの自己紹介および学生生活へのアドバイス等を行っている。

● 新入生セミナー(4月)

ここでは、入学して間もない1年生に対して、新入生どうし、そして新入生と教員や上級生との親睦をはかり、また、大学での学習についてや授業履修上の注意点等について伝

え、以後の大学生活への不安を軽減する努力をしている。

● **3、4年合同親睦会（11月）**

3・4年生向けには、毎年秋に懇談会を開いている。懇談会は、4年生から3年生へ、就職活動のこと、大学院進学のこと、4年生が行っている各ゼミの様子などを伝える場になっている。また、毎回ゲストとして、大学院生と卒業生の何人かに来てもらい、進学後の状況、就職後の状況について3・4年生に話をしてもらい、今後の参考にしてもらっている。

物理学における学生支援の現状

教授 奥村 剛

1) 学生支援体制

● 学年担当教員および就職担当

物理学の公式の学生支援システムは、本学が採用している補導教員（学年担当）のシステムである。1年生から3年生までは担当教員の持ち上がり、4年生は就職係が担当している。学年担当教員は学生の学習や大学生活上の問題についての相談相手になっている。担当教員は、入学式後の物理学ガイダンスで周知させているが、必ずしも学年担当でない教員にも気軽に話をしに行ってもよいことを同時に周知させている。

● 学生支援ティーチングアシスタント

全学共通と同様の体制を敷いている。

2) 学生支援行事

● 新入生八王子セミナー

4年間に履修するカリキュラムについての解説と専門科目間のつながりについて解説を行っている。

● 在来生合宿研修セミナー

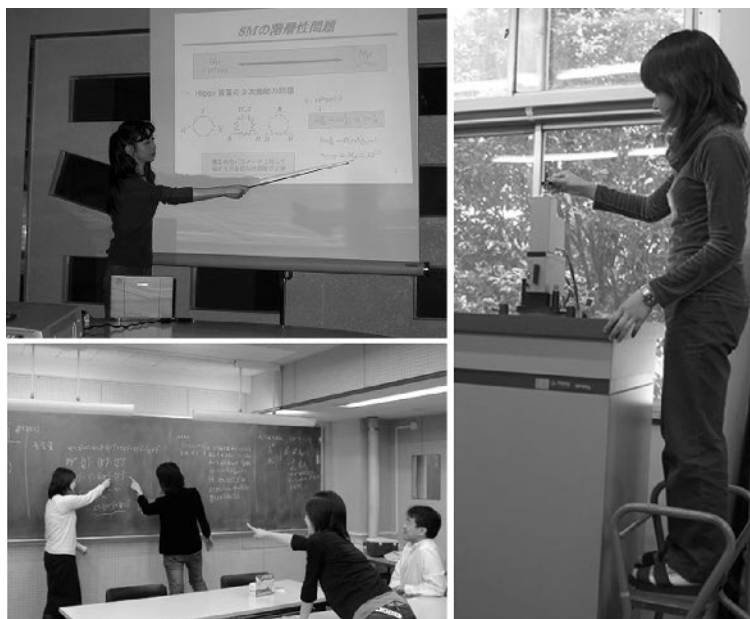
10月下旬2泊3日で、「草津セミナーハウス」で研修を行っている。主に物性関係の院生（修士）の研修であるが、4年生も随時参加してきている。

● 3年生の研究室配属指導

3年生の物理学特別講義V（選択、2単位）では、数名ずつの学生を研究室に配属している。この科目の目的は、早い時期に研究室での研究の様子を眺めさせ、簡単な研究課題を進める事によって、卒業研究への展望の材料にするとともに、就職活動に際の面接等にも役立つためである。教室とは異なるコミュニケーションがとれるので、学習だけでなく大学生活に関する問題に関してもよい効果が出ている。

● 4年生の卒業研究

4年生は卒業研究のために数名ずつ各研究室へ配属される。発表に向けて課題に真剣に取り組む事で、はじめて、物理の面白さに目覚める学生が多い。レポートを書く段階で、文章の教育、プレゼンテーションのやり方等、講義では出来ない教育がなされている。教員のみでなく研究室のすべての構成員とのコミュニケーションがあるので、大生活上の問題についても、自然な形で解決の糸口がつかめているように思われる。



化学科における学生支援の現状

教授 小川 温子
准教授 棚谷 綾

1) 学生支援体制

● 学年担当教員

学年ごとに2名（主、副）の教員が学年担当教員として学生の支援を行う。原則1名（副担当）が次年度に持ち上がる（翌年は主担当となる）ことにより、学生との関係に継続性を保っている。

● スーパーバイザー制

1年生から3年生の学生を対象に、化学科の教員（助教以上）一人あたり各学年の学生2～3名を割り当て、その学生の修学状況などについて相談にのる制度を平成15年から実施している。特に、留年生や不登校の学生に対しては、スーパーバイザーが目配りだけでなく、教室会議などの協議も含めて、より適切な支援や対策を早めに講じることが可能な体制を構築している。

● 飛び級・大学院9月入学の推奨

優秀な学生に対しては、飛び級および大学院に9月入学する制度を設け、修学期間の短縮による経済的負担を軽減し、早期修了による多様なキャリアパスの可能性を開くシステムを実施している。

● 桜化会（OUCA）への加入

桜化会は、化学科および関連大学院の卒・修了生と現旧教員で構成され、H18年度から在学学生も学生会員として加入できることとした。主に、求人・求職情報の提供、大学・会員に関連するイベントの紹介や講演会の開催などの活動を行っている。

2) 学生支援行事

● 新入生と教員の談話会（入学時）

新1年生、編入生およびその保護者と、化学科教員との顔合わせを行い、学科（大学院も含む）に関する全般的説明を行うとともに、各教員からのメッセージを伝えたり、学生

の自己紹介を行ったりする。

● 新入生セミナー（4月、1泊2日）

大学あるいは学部共通の行事として、1年生担当教員から化学科の教員紹介ならびにカリキュラムの説明を行う。また4年生を交えて、履修や大学生活についての相談、意見交換を実施している。

● 新入生歓迎会（5月頃）

スーパーバイザーの教員との顔合わせを行うとともに、化学科に所属する教員、研究員、大学院生、非常勤スタッフとの懇親を深める。

● 化学科研修会（10月頃、1泊2日）

化学科教員、学生全員の参加が原則の行事で、10年前から行っている。教員による研究室紹介、4年生・院生による卒業研究の紹介、3年生のインターンシップの報告などを行っている。また、卒業後のキャリアガイダンスを主眼として、卒業生による講演会を実施している。H20年度には、国立大学教員、企業研究所在職者による講演と懇親会を行った。

● 化学特別ゼミⅡ（秋学期）

1年生を6～7名の4グループに分け、毎週1コマの時間で、グループごとに各教員を訪問し、教員から研究内容の紹介やその背景となる専門分野の説明を受け、意見交換を行っている。研究設備、実験装置の見学等も含まれ、学部生が専門分野に関心を寄せる機会を作るとともに、教員や研究室との距離を縮めるきっかけとなっている。

● その他

- ・博士前期課程2年生による研究の中間報告会（4月）：大学院への進学をエンカレッジするために、学部学生の参加を奨励している。院生から直接、研究の楽しさや喜びなど、大学院での研究を実感として学部学生に伝えることに寄与している。
- ・研究室紹介（1月）：卒業研究に関して、事前に学生（3年生）に対して各教員の研究紹介を行っている。学生の希望と各研究室とのマッチングをはかるものである。
- ・そのほか、卒業生による講演会、企業や官庁などの説明会を随時行っている。



化学科研修会での卒業研究紹介



化学科研修会講演者との懇親会で

生物学科における学生支援の現状

准教授 服 田 昌 之

1) 学生支援体制

● 学年担当教員

生物学科の学生支援体制の中心は、補導教員（学年担当）システムである。1年生から4年生まで一貫して一人の教員が持ち上がりで担当し、各学生の情報を把握し、学習や大学生活における指導を行っている。

● 学生相談員

女性教員である西川（助手）が学生相談員として、学習や大学生活に関する相談にのっている。

● 学生支援ティーチングアシスタント

博士前期課程の大学院生が学生支援のTAを行っている。新入生セミナーに同伴し、時間割の立て方、学生生活の相談にのっている。

2) 学生支援行事

● 新入生懇談会

4月の入学式後に行う、新1年生、編入学生およびその保護者と生物学科の教員との最初の顔合わせの場である。学生による自己紹介、教員からの自己紹介および大学生活へのアドバイス等を行っている。

● 新入生セミナー

国立女性会館で、1泊2日の新入生セミナーを行い、学習や大学生活に関する心構えを教えている。新入生はTAの支援を受けながら時間割を作成する。教員やTAは、大学生活の様々な相談にものっている。新入生同士の親睦を深める大変良い機会にもなっている。

● 学生懇親会

11月には生物学科の4年生が手作りの料理により、1、2、3年生をもてなす懇親会がある。3年生にとっては卒業研究配属を直前に控え、先輩から研究室の情報を聞く良い機

会となっている。

● 卒業研究

卒業研究は必修科目ではないが、9割の学生が卒業研究を履修している。各研究室に数名ずつの学生が配属し、学生は毎日研究室に滞在し、各自の研究課題に取り組む。研究室のゼミでは、英語の論文等を読んで紹介し、質疑応答を通してその指導を受ける。2月の卒研発表に向けて真剣に研究に取り組むことによって、初めて生物学の面白さに目覚める学生も多い。研究室の構成員とのコミュニケーションを通じて、日常的に、大学生活や進路選択の支援を受けることができる。

3) その他

1年生後期から学生実験が始まるが、実験の合間や終了後には、担当の教員とTA（院生）と気軽に話せる雰囲気があり、学生から学習や将来の進路に関する相談を多く受け、指導を行っている。千葉県館山市にある湾岸生物教育研究センターでは、宿泊を伴う実習を行っており、学生同士や教員と学生の交流を深める機会ともなっている。学生生活全般について質問等があれば常時、研究室を訪ねて各教員に相談している。全教員が常時相談を受け付けている。

情報科学科における学生支援の現状

教授 吉田 裕 亮

1) 学生支援体制

● 学年担当

各担当教員は、担当学年の学生の情報を把握し、学習や大学生活上の問題についての、主な相談相手になっている。特に、1年生の担当教員は大学生活のスタートで、何かと不安持つ学生やつまづきかける学生が他の学年よりも多いため、より多く1年生に接する機会がある1年生への必修科目担当の教員を配置するようにしている。

● 就職担当教員

情報科学科では就職担当の教員を配置して学生の就職への支援を強化している。就職担当教員は学科への求人会社との窓口であると同時に就職希望の学生の就職へのアドバイザーとしての重要な役割りを果たし、学生の社会進出の支援を行っている。

2) 学生支援行事

● 入学式後の懇談会および新入生セミナー

入学式後に、学生による自己紹介および教員からの自己紹介および学生生活へのアドバイス等を行っている。また、後日の1泊2日の新入生セミナーにおいては随伴の教員のみならず、上級生も同行し新入生の学習や大学生活に対する説明を行っている。特に、ここでは学科のカリキュラムの説明と共に履修指導を行っている。同行学生からは大学における勉学の方法、さらには、各研究室での研究・教育の紹介も行う。また、1泊2日ながら寝食を共にすることにより、新入生同士の親睦を深める重要な機会にもなっている。

● 在来生合宿研修

毎年、情報科学科の3年生に向け進路ガイダンスとしての1泊2日の合宿研修をおこなっている。3年生ならびに教員は原則全員参加で、さらに各研究室より学生を同行し3年生への研究室紹介も行っている。

平成19年度ならびに平成20年度と2年連続で幕張にある財団法人海外職業訓練協会（OVTA）にて行った。プログラムとしては4年生以上の学生が中心となり3年生に向けて卒業研究のための研究室紹介および研究の概説を行った。また、教室主任からは大学院進

学ガイダンス、就職担当教員からは学科としての就職ガイダンスも行った。更に、懇親会では個別に上級生が進学・就職の体験談、研究室での研究の進め方など3年生の進路に関しての有益なアドバイスや学生どうしの活発な情報交換が行われた。

毎年、3年生からの意見によれば、非常に有益な行事であるとの結果を得ている。3年生どうしならびに上級生との更なる親睦も深まり、学生間の相互支援としての大きな成果を得ている。



H20年度 在来生合宿研修（研究室紹介）



H20年度 在来生合宿研修（懇親会）

Ⅲ 生活科学部

Ⅲ 生活科学部

生活科学部ピアサポートの取り組みと成果

教授 藤崎宏子

(H19-20年度 生活科学部ピアサポート委員会委員長)

1 平成19年度の活動

生活科学部におけるピアサポートの取り組みは、平成16年度からスタートし、4年目を迎えた。もともと新規の取り組みというより、各学科・講座が従来からおこなってきた活動や行事をピアサポートの理念に則って整序したという経緯があるため、本事業に対する学生側・教員側の理解はいつそう深まり、活動もすっかり日常化した感がある。

第1回委員会は6月6日にもち、まず各学科・講座の活動実績及び活動計画の報告があった。続いて、これまで毎年おこなってきた全学科・講座の学生実行委員交流会の開催について諮り、今年度も開催するという決定をした上で、その持ち方につき話し合った。

第2回委員会は7月2日にもち、10日に予定されている交流会の詳細について話し合った。恒例により茶菓の用意をするが、その経費は教員側ピアサポート委員及び学部長のカンパでまかなうこととなった。他に、生活科学部のホームページに掲載されているピアサポートの取り組みのページをアップする必要がある、その日程や手順について検討した。

7月10日の学部ピアサポート学生実行委員交流会には、各学科・講座の計29名の学生実行委員が参加した。御船学部長の挨拶に始まり、教員側委員5名も交えて、各学科・講座の取り組みに関する学生委員の報告や情報交換がおこなわれた。また交流会終了後には、教員側委員が第3回委員会をもち、交流会の反省と今後の活動に関する確認などをおこなった。

平成19年度は報告書作成の予定がなく、また大きな検討課題もなかったため、7月以降は委員会を開催せず、連絡事項をメールで流すなどの方法で対応した。

なお、平成19年度の委員会構成は、以下の通りである。

委員長：藤崎宏子

委員：赤松利恵（食物栄養学科）、仲西正（人間・環境科学科）、岩壁茂（発達臨床心理学講座）、石井クンツ昌子（生活社会科学講座）、吉村佳子（生活文化学講座）

2 平成20年度の活動

今年度は委員長以外の教員側委員が以下のとおり全員交替し、委員会組織としては新たに再スタートを切ることとなった。

委員長：藤崎宏子

委員：山本茂（食物栄養学科）、太田裕治（人間・環境科学科）、青木紀久代（発達臨床心理学講座）、永瀬伸子（生活社会科学講座）、鈴木禎宏（生活文化化学講座）

5月14日に第1回委員会がもたれ、委員長よりこれまでのピアサポートの活動につき簡単な紹介がおこなわれた後、今年度の活動方針を話し合った。例年通り、7月上旬に学部ピアサポート学生委員交流会をおこなうこと、日常的な活動は各学科・講座の独自性を活かしておこなうことなどの基本方針を確認した。また、デジカメやピアサポート室など共有財産の確認と使用ルールなどを周知した。委員会開催や連絡体制については、教員側委員の交代はあってもほぼ支障なく委員会運営ができると見込めることから、今年度も前年度同様に小さな案件や全学ピアサポート連絡会からの伝達事項はメール上で処理し、実際の活動は各学科・講座の裁量に委ねるという方針も再確認した。

このため、7月2日に予定されていたピアサポート学生実行委員交流会の準備についても、もっぱらメール会議で具体化していった。

7月2日の学生実行委員交流会当日は、各学科・講座の計31名の学生実行委員、5名の教員側委員が参加した。戒能学部長代行よりピアサポートの意義についてお話があったあと、各学科・講座の取組について発表があり、質疑応答がなされた。前年同様茶菓の用意をしたが、その資金は、御船学部長の提案により6月の教授会で教授会メンバー全員にカンパを募って集めたものである。会の後半は、各学科・講座の学生委員が交じり合って着席して直接交流をし、終始和やかな雰囲気のうち会を進行することができた。



ピアサポート学生実行委員交流会 2008. 7. 2

参加者にはアンケートに回答してもらったが、その意見傾向は以下の通りである。

- 1) 交流会に参加しての感想：他学科・講座の学生と交流する機会があまりないので、いろいろな話が聞けて楽しかった。よいアイデアは自分たちの活動にも取り入れていきたいなど、ほぼ全員が肯定的なコメントをしていた。
- 2) 今後の交流会の持ち方への要望：時間帯は遅すぎるという意見もあったが、授業等の関係でやむをえないという意見が大勢を占めた。開催時期は、もっと年度の初めのほうがよい、次期への引き継ぎを考えて年度末がよい、今のままでよいなど、多様な意見がみられた。開催頻度については、年1回が適当であるという意見が多数派を占めるものの、もう少し回数を増やすことを望む声も一定数あった。会の後半で、学科・講座で交じり合って座ったことで、身近にいながらよく知らなかった他学科・講座の学生とおしゃべりできたことは、たいへん好評だった。
- 3) 日常的活動で困っていることや要望：「とくにない」という回答も多くみられた一方で、いくつかの具体的な問題点が指摘された。行事を企画しても人数が集まらない、とくに3、4年生の集まりが悪い。逆に、全学年だと人数が多すぎて日程調整や場所の確保が困難。学生から会費を徴収しているが、わずかな金額なので企画を立てる際に選択肢が限られてしまい苦労する。活動や行事がマンネリ化しがち、などの意見があった。

交流会終了後、教員側委員は第2回委員会をもち、交流会を次年度以降も継続的におこなうことが望ましいという基本方針を確認した。交流会以外の学科・講座を超えての交流を望む学生の意見があることも話題になったが、すぐに公式的に対応することは難しいため、参加可能な学科等のイベントなどがあれば、他学科・講座にも情報を流してはどうかなどのアイデアが提案された。

3. 反省と課題

委員会運営に関しては、開催回数を最小限にとどめ、小さな協議事項や一般的な伝達事項はすべてメール上ですませたが、とくに問題なく進めることができた。日常的なピアサポート活動については、本事業開始当初から、各学科・講座の歴史や特性を活かして独自におこなうという基本方針に則って実施してきており、安定的に運営されているといえる。ただし、活動やイベントをおこなうための財源の確保は、悩みの種である。現状では、学生が自主的に会費を集めたり、教員がカンパをして活動費に充てるなどの対応がとられているが、それも限りがある。また、本活動に対する学生の関心や熱意に個人差があり、学生実行委員が呼びかけても人の集まりがはかばかしくないこともある。これらの点については、今後とも学生の自主性を尊重しながらも、教員も側面的に支援していきたい。

食物栄養学科ピアサポート報告

教授 山本 茂 (2008年度)

准教授 赤松 利恵 (2007年度)

食物栄養学科は、2004年度に管理栄養士養成施設となり、2007年度（2008年3月）に食物栄養学科として、初めての卒業生を送り出しました。管理栄養士養成施設であるため、履修単位数も多く、授業もたいへんですが、同級生、先輩後輩、協力しあいながら、充実した学生生活を送っています。本稿では、2008年度の活動を中心に、食物栄養学科のピアサポートの活動をご紹介します。

新入生セミナーと在来生セミナー

本学科では、毎年4月に新入生を対象とした新入生セミナーと9月に2年生と3年生を中心とした一泊二日の在来生セミナーを実施しています。新入生セミナーは大学企画のもので、新入生同士の交流のみならず、先輩の学年にあたる学生も参加し、新入生の履修登録や学生生活などについて相談にのっています。

在来生セミナーは、学生、教員との親睦を目的に、学科内で企画し行っています。2007・2008年度は、国立赤城青少年交流の家（群馬県）にでかけました。毎年、約70名の学生および教職員が参加し、ともに食事をし、スポーツやハイキング、また、みんなで、食に関する施設を訪問します。2008年度は、明治製菓(株)の工場と研究所

写真1

2008年度在来生セミナー (2008.9.23-24)

を訪問し、OGの方々のお話を伺いました。また、2008年度はバーベキューも行い、良い思い出ができました (写真1・2)。

写真2

2008年度在来生セミナー (2008.9.23-24)

徽音祭における「ときわじるこ」

食物栄養学科では、毎年、徽音祭で、お汁粉「ときわじるこ」を出店します。この「ときわじるこ」は、代々引き継がれているレシピで、「ときわじるこ」を楽しみに、徽音祭に来られる方もいらっしゃると聞いています。2008年も1年生と2年生の共同作業により、おいしい「ときわじるこ」がふるまわれました。2008年度は、ホームカミングデー（2008年5月31日）の日にも、食物栄養学科の学生有志による「ときわじるこ」を企画し、OGのみなさまに、召し上がっていただきました。

学生サークル「Ochas（オチャス）」の活動

学生サークルOchasは、食物栄養学科の学生を中心とした食と栄養に関するサークルで、学年をまたがった活動は、実質的にピアサポートの役割を果たす存在といえます。Ochasは、2006年から活動を行っており、2008年も様々な活動を行いました。

まず、「おやつレシピ」を作成したことがあげられます。これは、Ochasナーサリーチームが、お茶の水女子大学附属いずみナーサリーで作っているおやつのレシピをまとめたものです。「おやつレシピ」には、20種類以上ものレシピが写真つきで紹介されています。「おやつレシピ」の企画、メニュー作成、写真撮影など、OchasOGの協力を得ながら、すべて学生が行いました（「おやつレシピ」は、文部科学省特別研究経費「子どもの発達・成長過程を見通した食育の実践と教育プログラムの構築（通称：食育プロジェクト）」の協力のもと、作成されました）。また、食育プロジェクトによる食育シンポジウム（2008年10月13日）では、Ochasの活動発表を行い、多くの来場者の方に、Ochasのことを知ってもらうことができました。

さらに、2008年度は、お茶の水女子大学後援会の支援を受け、Ochasスイーツチームがお茶の水女子大学のお土産「お茶とお豆のパウンドケーキ」を企画・開発しました。レシピ開発から、製造委託業者との交渉、契約など、すべて学生同士で協力しあい、行いました。パウンドケーキは、Ochasのスープとともに、徽音祭で販売されました（写真3）。大好評だったため、卒業式や入学式など、今後も大学行事の際、販売する予定です。



写真3
2008年徽音祭（2008年11月8－9日）

この他に、食物栄養学科には、卒論発表の後に、3年生が4年生を手作りの料理をふるまう「追いコン」があったり、学生同士の交流は盛んに行われています。

人間・環境科学科 2007～2008年度の活動報告

准教授 太田裕治

1. 人間・環境科学科における年間の活動スケジュールの概要

- 4月 新入生オリエンテーション、Tea Hours (新入生歓迎会など)
- 5月 新入生歓迎BBQパーティ (1、2年生対象)
- 7月 Tea Hours (後述。議題：3年次研修、インターンシップなど)
- 9月 学外3年次研修(一泊二日) 卒業研究や進路などに関し学生・教員間で話し合う。
- 10月 Tea Hours (議題：研究室配属、就職活動など。)
- 2月 Tea Hours (議題：進級条件など。)

以下に順次内容を述べる。

(1) 新入生オリエンテーション

本学では例年、新入生を対象に入学時オリエンテーションを行っている。2007年、2008年は、独立行政法人国立女性教育会館(埼玉県比企郡)にて、1泊2日の日程で開催された。オリエンテーションでは学科教員から一般的な学習説明・生活指導が行われるが、加えて上級生(2年生)による、より具体的な追加説明が(時として深更まで)行われる。大学での科目履修の仕方は高校と比較すると自由度が高く戸惑う姿も見受けられるが、先輩達の暖かい指導により各人の進む道を徐々に見い出して行くようである。(右写真：オリエンテーションの様子)



(2) 新入生歓迎BBQパーティ

ゴールデンウィークを過ぎ、大学生活がやや落ち着き始めた頃、人間・環境科学科では新入生を対象に毎年歓迎BBQパーティを開催している。ここ数年は、平日の夕方、講義終了頃、学内(総合研究棟前の広場)にて実施している。2年生を中心に上級生にも開催通知を出すため、新入生は上級生とも懇親を深めることができる。

(3) 3年次返子研修

卒業研究や就職活動を間近に控えた3年生を対象に泊まりがけ(一泊二日)で研修を行

っている。ここ数年は、初日に鎌倉付近を中心に散策した後、逗子市の宿泊施設にて研修を実施している。2008年の研修参加者は25名であった。参加費用は大学の補助もあり、3500円と押さえられている。研修後のアンケートでは、この金額に対しては大多数が普通〜安いと回答している。また、宿泊を伴う研修の必要は無いという意見も半数ほど見られるが概ね満足との回答が得られており今後も継続の予定である。アンケート中の自由意見としては、

【良かった点】 教員から各研究室の具体的な話を聞いて特徴や様子がわかった。各研究室の比較がしやすかった。研究室配属について詳しく聞いた。4年時にどのような生活になるかを想像できた。今後のスケジュールが分かってよかった。気軽に質問できる形態がよかった。

【不足点】 就職に関する話をもっと聞きたかった。具体的に決まっていな部分があり、研修を行うのであれば概略が決まってから行ってほしかった。研修の部分は大学でもできたと思う。話の内容が思っていたよりも浅かった。



等があげられている。

2. Tea Hours

学科独自の取り組みとして、2007年度に”Tea Hours”と呼ばれる教員―学生間の学科懇親会を立ち上げ、年4回ほど実施してきた。学年進行に応じ、履修や進路計画などの支援を行っている。開催頻度としては、当初は月1回程度の予定であったが、アンケートの結果、現在は、年4回程度（各学期はじめと学期末）としている。各回のテーマ（議題）に関しては学生の意見を聴取しラフに決めている。また、学年担任は原則参加である。開催の時間帯は平日夕方（8コマ後）、1時間程度である。出入りを自由とし、気楽な雰囲気で開催している。なお、茶菓子代に関しては、学生から50―100円を徴収する案もあったが、現在は教員によるワンコイン・ドネーションである。運営方式に関しては、今後、順調に開催が進めば、各学年ピアサポート委員に移管する計画であるが、現在は、アンケートにもとづき教員と協同で行う形態としている。現在までの開催状況を以下に記す。

2007年度

- ① 11月5日 議題：3年次研修アンケート報告、卒論研究室配属など。本会の開催方式に関するアンケートを実施。
- ② 1月18日 議題：前回アンケート結果、大学院入試など。

2008年度

- ① 4月25日 議題：歓迎BBQパーティ（1年）、時間割の組み方、4年進級ルールについて、他学部卒論について、インターンシップ（3年）、逗子研修（3年）、卒論・就活進行状況（4年）など。
- ② 7月22日 議題：1年：前期を終えて、3年：逗子研修、研究室配属ルールの改変（他学部卒論について）、インターンシップ、4年：就活・卒論状況、オープンキャンパスなど。
- ③ 10月29日：ドイツサマースクール報告。3年生インターンシップ報告、各学年の履修関連事項の連絡。3年次逗子研修報告。
- ④ 2009年1月23日（予定） OG講義等を予定。

人間・環境科学科は学科改組しまだ、5年目であり、今後もこの懇談会を継続することで、学科の方向性に関する検討資料を得る考えである。

発達臨床心理学講座のピアサポート活動実施報告

准教授 青 木 紀久代

1. 発達臨床心理学講座におけるピアサポート活動の枠組み

発達臨床心理学講座では、これまでの教員と学生との相互交流の歴史の中で、様々な学生支援を意図した取り組みが育ってきた。年中行事として定着している取り組みを、ピアサポート活動という観点から見直すと、次の3つの活動があげられる。

① 新入生に対するオリエンテーション合宿：

教員・先輩からの学生生活や、履修計画のアドバイスなど、大学生活をスタートさせる上でのサポートを意図している。毎年4月に実施されてきており、そのときに同行した教員が学年担当となり、卒業まで、フォローすることになっている。

② 3年生に対する発達臨床心理学講座独自の合宿：

ゼミ紹介を行い、卒業論文や進路などを視野に入れた大学生活へのアドバイスを具体的に行う。毎年4月か5月に一泊の合宿として実施されている。発達臨床心理学講座の全ての教員が参加している。

③ 学生同士の運営によるピアサポート：

ここでは、③の活動を中心に平成19年度と平成20年度の活動の概略を次に示す。

2. 平成19年度ピアサポート活動内容

4月 時間割相談と交流会：

お昼休みに2年生が1年生に対し、時間割の作り方などをアドバイスした。また、交流会を行った。1・2年生を中心に全学年に声をかけ、放課後に空き教室を使って集まった。お菓子や飲み物なども用意し、アットホームな雰囲気です学年を超えた縦のつながりが出来るように心がけた。

5月 ピアサポート委員の顔合わせ：

ピアサポート委員の顔合わせ、自己紹介などを行った。前年度の活動の内容やその反省などを話し合い、今後の活動について検討した。

7月 進路懇親会：

企業に就職が決まった4年生に、進路決定のプロセス、就職活動、就職試験などの経験を話してもらった。30名ほど参加者が集まった。後輩へのアドバイスだけでなく、個別に質問時間を設けた。進路に対して関心の高い学生が多く、直接先輩から話を聞ける機会だと

いう事で、たくさん人が集まり、活発なやりとりがみられた。

10月 交流会と新委員のオリエンテーション：

ピアサポート委員の1年生が主体になり、交流会を行った。ピアサポート委員としての仕事を覚えてもらうため、4月に行った交流会を参考に、2年生からのアドバイスも受けながら、部屋取りや連絡など全てを1年生に行ってもらった。

12月 3年次ゼミ説明会：

3年生にゼミ説明会をしてもらう会。それぞれの所属ゼミの雰囲気、どんな事を授業でやっているか等。2年生はほぼ全員が参加した。

1月 進路懇親会：

教職、公務員、院に進路が決まっている先輩に話を聞く会。それぞれの活動の様子、先輩へのアドバイス、また最後に個別の質問時間を設けた。7月同様、30人程度集まり、質問なども活発に行われていた。先輩方が作ってくれたレジュメもとても分かりやすく、後日参加できなかった人が友達にコピーを頼んだりもしていた。

2月 委員の引き継ぎ：

ピアサポート委員内で引き継ぎを行う。2年生が1年生に1年の流れを説明し、会計係は会計報告をした。

ピアサポート委員 教員 岩壁茂、1年生 江副杏子、千歳愛美、林田有美子、
2年生 佐々木章乃、三宅智子、小林奈央、
3年生 安彦真実、一戸麻希、児玉理紗、
4年生 黒岩資子、中根由香子、渡辺悠

3. 平成20年度ピアサポート活動内容

4月 新入生時間割相談会：

1年生の必修の授業のあとの休み時間に、2年生がその教室に行き、時間割や履修登録についての質問を受けた。特に教職をとっている人からの相談が多く、2年生は1年前を思い出しながら相談にのっていた。1年生は半数ほどが参加し、相談会を通して1-2年の交流を深めることもできた。

7月 生活科学部全体のピアサポート委員顔合わせ：

昨年は2年目の委員だったが、今年は委員が変わったため、7月の教員が呼びかけて実施されたピアサポート委員顔合わせ会が、委員の自覚を持つ良い機会になったという。教員の方も、委員が替わっていたので、タイムリーな企画であった。

もちろん、他のピア委員の活動を知る機会としても貴重なものだが、年間の見通しなども、和やかな雰囲気の中でアバウトに確認し合うことができた。

7月 進路懇親会：

企業の内定をもらっている先輩に報告をしてもらう会。本年度は3名の学生が報告を行ってくれた。参加者は20名程度であった。

10月 1年生ピアサポート委員企画の交流会：

学年を超えた交流会として、ざっくばらんに話をする機会を設けた。10名程度参加した。

11月 進路懇親会：

公務員や教職に就いた先輩4名に話を聞く会。参加者は1・2年生を中心に20名程度であった。先輩の報告後に行われた個別相談の時間では、参加者の積極的に質問や相談をしている姿が見られた。

12月 3年次ゼミ説明会：

昨年から実施している。3年生8名が、2年生に向けてゼミを紹介した。2年生はほぼ全員が参加した。3年生になったときに教員からゼミの紹介があるが、それに先だって、学生の視点からそれぞれのゼミについて紹介した。

参加者の関心は大変高く、好評であった。

2月 進路懇親会：

例年通り、大学院が決まった先輩に話を聞く会。

一年間の連絡は、学生委員のインタビューによると、「自然発生的に」なされており、上記の活動がほぼ定着し、それぞれの学年の委員が一年前の体験を思い出して、適切な時期に連絡を取り合い、「お互い無理のないように」を心がけつつ、楽しく活動が継続されている。

ピアサポート委員 教員 青木紀久代、

1年生 榎本恭子、竹島千日子、斎藤みなみ、

2年生 江副杏子、千歳愛美、林田有美子、

3年生 伊川千晶、佐野祥子、長谷川沙織、

4年生 安彦真実、一戸麻希、児玉理紗

4. 2年間の活動を通して

2年間の活動と学生のピアサポート委員のコメントを総合すると、現在の発達臨床心理学講座のピアサポート活動の特徴は、次のようになる。

① 一番関心が高いのは、ゼミ選びや、進路懇親会である：

多くの学生は、大学生活の中で、楽しくつきあえる仲間をそれぞれに見つけて、交流を育んでおり、単なる交流目的の会などは、あまり重要ではないらしい。

しかし、進級や卒業に伴う課題や進路選択など、同級生だけの情報では、心許ないものもあり、学年を超えて交流できる場があることで、安心して共通に必要な情報が得ること

ができることは、多くの学生にとって、ありがたい企画となっているようである。

② 委員の人数は3人が適切である：

委員の任期は2年であり、2年生が中心となって企画・運営しており、それを3年生が支えている。連絡や、各学年の委員の誰かが参加ができるような日程を無理なく確保していくために、委員の人数は3人くらいがベストのようである。

③ 日程の調整、連絡の取り方などには改善の余地がある：

交流会での学年間における参加人数の偏りを小さくすることは、目下の課題である。ピアサポート委員の声かけや連絡の仕方に差があり、学年によって集まり方に差が出てしまった面がある。できるだけ早く予定を立てて、インフォメーションを確実に、広く行える工夫を講じる必要があるという意見が出ている。

④ ピアサポート活動の定着と発展的自立：

ピアサポートの活動は、学生同士の自主的な活動として定着してきた印象を受ける。例えば、いわゆるOG訪問などは、初期のピアサポート活動報告には記載があったが、今回、学生委員達は、ピアサポート委員が主となる活動としては、それを位置づけなかった。

これらの活動は、学生それぞれのニーズに基づいて、研究室、部活やサークル、あるいは出身高校など、ピアサポート活動で提供できる出会い以外のつながりも積極的に活用して実施されている。ピアサポートの活動の良いところは、「あってじゃまにならない」、「必要のない人もいるが、あると助かる、くらいの人もある」という程良いサポート環境を作るシステムになっているところであり、そのことに自覚的な学生委員が多く見られた。

そして、彼らが、そうした環境は必要だし、この程度の役割なら引き受けても良いと思ってくれていた。教員として、何よりも頼もしく嬉しく感じたところである。

生活社会科学講座ピアサポート活動報告

教授 永瀬伸子 (2008年度)

教授 石井クンツ昌子 (2007年度)

生活社会科学講座では、各学年2、3名のピアサポート委員および1名の教員からなるピアサポート委員会が、新入生歓迎会、就職活動に関する交流会、クリスマス会、ゼミ選びに関する交流会などを開催している。2008年の事業は、2007年の事業をほぼ踏襲したものである。2008年の事業について報告する。

① 新入生歓迎会

2008年7月1日 5時から7時半 大学本館306室

新入生歓迎会は、新入生が講座の先輩と知り合う良い機会となっている。フレッシュマン・キャンプに先輩3名程度が同行した際に、同行学生から1年生への委員参加への呼びかけがなされたため、ピアサポート活動は、1年生に、楽しい交流活動として受け止められた様子である。ただしなかなか日程が合わず遅い時期での開催となってしまった。来年度については、前年度のうちに、だいたいの日程にめどをつけて予定していた方がスムーズかもしれない。

「新入生歓迎会では、多くの一年生が参加してくださいました。お菓子や飲み物を囲んで、学業のこと、サークルのこと、寮のことや恋愛話まで色々な話題が飛び交いました。みんなで楽しく話していると時間が過ぎるのがとても早く感じました。また、学年を超えた交流の場を設けることで、講座としてのまとまりや雰囲気が良くなるのではないかと思います。」(2年感想)

(打ち合わせ会 6月19日 委員自己紹介、昨年の行事確認、今年の行事予定決定)

② 就職活動報告会あとの交流会

10月22日 6時から8時半 大学本館103室

4年生による就職活動報告会が講座の行事として例年通り行われた。就職先が公務員、メーカー、金融、マスコミなどさまざまであるので、個別に話しを聞く機会として、講座の行事のあとにピアサポートによる交流会を開催している。今年は部屋の都合から103室に場所を移して行われた。就職のリクルーターを兼ねて卒業生が1名見えていたため、ピア

サポート交流会への参加をお誘いしたところ、企業を離れ、先輩として卒業後の10年について話をしてくださった。卒業生と学部生との交流は、2007年のホームカミングデーからはじまっているが、この交流会に卒業生を呼ぶのも良い機会とも思われた。

(打ち合わせ会 10月8日昼休み 委員による運営)

③ クリスマス会 12月18日

17時から19時 大学本館124室

お茶とケーキ、お菓子を食べながら、先輩後輩同士でおしゃべりをする、なごやかでじんまりとした会となった。以下写真参照

(打ち合わせ会 12月10日 昼休み 委員による運営)



④ インフォーマル・ゼミ・オリエンテーション

1月15日 大学本館306室 18時から20時

前日に、講座の行事として、教員によるゼミ説明会があるが、その翌日に、先輩の話を聞く、という形で、ゼミ紹介も行う。3年生の呼びかけで、各ゼミ参加者の先輩が出席する形で、2年生や編入生を対象とした、インフォーマルゼミオリエンテーションが開かれた。ゼミ旅行や卒論の苦勞の情報交換する機会にもなっている。

「1月15日(木)に開かれたインフォーマルゼミオリには、忙しいなか都合をつけて多くの先輩方が参加して下さり、私たち2年生の質問1つ1つに丁寧に答えて下さいました。前日に開かれたフォーマルのゼミオリでは聞けないような、各ゼミの雰囲気や飲み会、合宿、先生の性格(?!)等、ゼミを選択するうえで重要な情報をたくさん入手することができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。」(2年感想)



⑤ 学生・教員間の連絡網

ピアサポート委員会の本来の目的外かもしれないが、ピアサポート委員会のメーリングリストがあることで、教員から学生委員へ、そして学年学生委員から各学年へと急な案内や連絡を出すことができた。たとえば急に開講されたバツサー大学のKennet教授の国際経済であるが、生活社会の1年生から6名くらいの参加があったが、メーリングリストが生きたと思う。良い経験だった、実り多かったというアンケートの回答が多く、急な連絡ができる仕組みがあって大変良かった。次のような連絡に連絡網が役立った。○急に開講される講義の案内(生活と財政)○英語による講義の案内(Kennet先生国際経済の講義、Allen先生集中講義)○防災訓練の案内 ○学生表彰の対象候補がいるかどうかの問い合わせ

2008年度生活社会科学講座ピアサポート実行委員メンバー

浦邊織奈・斉藤花衣

市川明矢子・清水茉莉子・峠田彩香・堀江富美

植木洋子・皆藤美成・鈴木朝・平嶋由梨子・保科優希恵

飯田周・池山美里・岡田有紀・柏楊

生活文化学講座 ピアサポート活動の記録

2007年度

准教授 吉 村 佳 子

2007年度の活動としては、生活文化学講座内のピアサポート実行委員達が話し合い、在学生の大きな関心事である就職活動に関し、これまで希望がありながら実施できなかった、講座卒業生を招いての就職活動の実際と就職後の状況について話を聞く会を企画した。懇談会は10月以降の開催とし、三年生の実行委員が卒業生との連絡調整に当たり、12月13日19時から開催と決定、事前に在学生からの質問を連絡しておくことにした。また当日の運営は一、二年生の実行委員が担当することが決まった。

懇談会は、四名の卒業生を招き、就職活動が身近な問題である三年生のみならず一年生も参加して、総勢30名余の出席により行われた。卒業生からは、在学時に大学に提出した就職状況アンケートを手許に用意するなどして、就職活動の実際が極めて具体的に述べられ、さらに就職後の状況が現在の心境も交えて語られ、その内容は非常に興味深いものであった。また在学生からは多々質問が出され、卒業生はそれらに丁寧に応答してくれた。懇談会は、親近感を覚える先輩の話でもあったことから、真剣ななかにも和やかな雰囲気で行われ、これから就職活動を行う在学生にとっては、漠然と抱いていた不安の一端が些かなりとも解消され、有益な就職情報を得ることができた場となった。

2008年度

准教授 鈴 木 禎 宏

懇親会

6月13日（金） 午後5－8時ごろ

大学本館321室

6月13日（金）に学生相互の交流をはかるべく、懇親会を行った。

この懇親会は、学部2－4年生のピアサポート委員が中心となり、計画された。これに対し教員は、会場の提供や資金の援助などの支援を行った。（写真1）

懇親会は午後5時、大学本館321室で始まった。一年生14名、二年生3名、三年生6名、四年生6名が出席した。御菓子とジュース・お茶、宅配のピザなどは学生（ピアサポート委員）が手配した。（写真2）

生活文化学講座では、日頃学年を超えた交流が少ないので、この懇親会は他の学年の学生と話ができる貴重な機会となった。1、2年生は上級生から学生生活や授業の履修について、3年生は4年生から就職活動などについて話を聞くことができた。また、入学後間もない1年生の中には、同じ学年の学生と交流を図る者もいた。

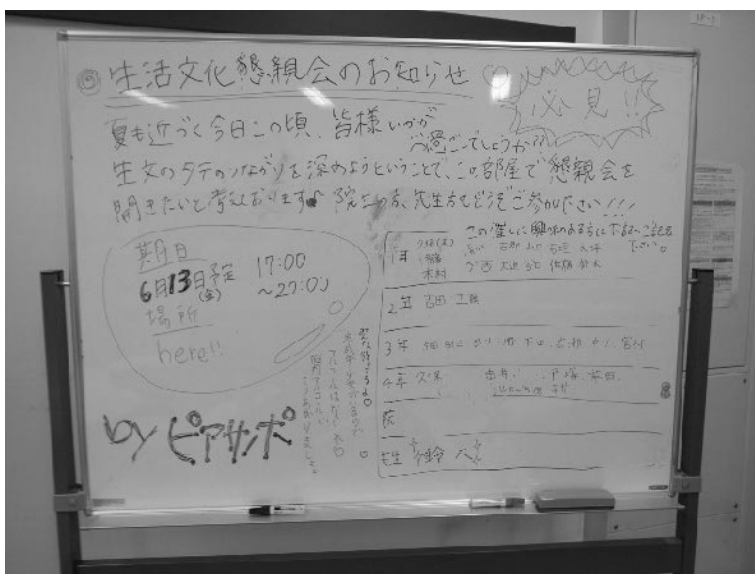


写真1



写真2

IV 全学留学生

IV 全学留学生

全学の留学生のためのピアサポートの報告 (2007年度、2008年度)

准教授 加賀美 常美代

1. グローバル教育センターのピアサポート

お茶の水女子大学グローバル教育センター（2001年度は留学生センター、2006年度からは国際教育センターとされ、2008年度から語学センターと統合してグローバル教育センターと改組された）の全学の留学生を対象とするピアサポートとしては、大学院生チューターによる留学生相談室と国際交流グループT E Aの活動がある。

留学生支援は、大学コミュニティの中で留学生が自立を促し、留学目的を果たせるように行う直接的、間接的援助である。文化的背景の異なる留学生支援は、日本人学生とは異なり多様な側面も持つ。そのため、留学生に関連するさまざまな学内部署（保健管理センター、学生相談室など）や指導教員、教職員、チューター、ボランティアが連携しあう必要がある。とりわけ、先輩が後輩に助言などを行うメンターサポート、同輩同士が情報提供などの援助を行うピアサポートの活用は重要である。特に、新入留学生が日本のことを熟知する日本人学生や留学生の先輩から情報を受けることは、ピアサポートの重要な役割である。4月と10月の新入留学生オリエンテーションの時には、留学生相談室チューターはキャンパスツアーを、国際交流グループT E Aは新入生歓迎会（ウェルカムティパーティ）を実施している。

2. 大学院生チューターによる留学生相談室

30年近く伝統のある、留学生相談室は大学院生の運営により継続されてきた。2007年度の運営は、原周子さん（前期）、石原翠さん（後期）がチューター長となり、2008年度は石原翠さん（前期）、長戸裕香さんがチューター長となり、運営メンバー3名とともに相談室運営を進めてくれた。詳しいことは2人の報告を参照されたい。相談室では、年に2回、4月はじめと9月末の新旧メンバーの交代時期と新入生の受け入れ時期にチューター長が中心となり、総会を開き、情報の共有、職務・役割確認、事例検討などを行っている。担当教員は「留学生のサポートについて」というテーマで、留学生の危機、留学生との関わり方、関わる際の注意事項、教員との連携などについて講義を行うとともに、事例検討会での助言を行っている。このように、総会はチューターが相談業務をスムーズに行うため

のオリエンテーションと研修会の意味を持つ。また、2007年度、2008年度も担当教員が新入チューターの個別面接を行い、チューター活動の動機を確認し、積極的に関与してくれるチューターを採用するように努めると共に、資質の向上を促した。

相談室には、日常のレポートや論文の添削活動のほかに、相談室を円滑に運営させるために、図書管理、パソコン維持管理、懇親会、整理美化、相談室統計、相談室便り発行など、さまざまな役割があり、それをチューター各自が担うことで運営がスムーズに進んでいく。メールリングリストがあり、日常的に連絡事項や情報交換が行われている。それを活用することで、チューターが対応に困った時、即座にチューター長及びチューター同士で助言をシェアすることができる。また、必要に応じて教員が介入し、コンサルテーションをすることもある。その際、3名の留学生チューターの意見が留学生のニーズや気持ちを代弁してくれることがあり、非常に重要な存在となっている。詳しい情報は留学生相談室だより（11号、12号）を参照されたい。

表1と表2は、日々の活動の記録で、2007年度、2008年度の相談件数を挙げたものである。相談室は8月、3月は休室としているが、2007年度は2月末に、2008年度は12月末に集計した相談件数である。2005年度、2006年度（ピアサポート報告書2号参照）に比べ、2007年度の利用率ははるかに高いものとなった。ここに学生による学生の援助の効果を見て取れる。この表を見ても、大学院生の利用者率が非常に高いものとなっていることが特徴的である。

表1 2007年度の留学生相談室の相談件数（4月～2月末）

2007年度 (4月～2月末)	チューター室	控え室	P C	合計
研 究 生	54	123	725	902
博 士	126	30	219	375
修 士	180	114	538	832
文教育学部	41	98	452	591
生活科学部	2	1	45	48
理 学 部	15	0	16	31
日 研 生	22	43	167	232
交換留学生	4	29	186	219
そ の 他	18	12	98	128
不 明	13	108	207	328
合 計	475	558	2653	3686

表2 2008年度の留学生相談室の相談件数（4月～2月末）

2008年度 (4月～12月末)	チューター室	控え室	P C	合計
研 究 生	96	150	620	866
博 士	81	19	201	301
修 士	117	75	395	587
文教育学部	49	183	296	528
生活科学部	23	18	64	105
理 学 部	2	1	4	7
日 研 生	29	43	224	296
交換留学生	13	10	196	219
そ の 他	4	7	42	53
不 明	7	48	92	147
合 計	421	554	2134	3109

内容についてはP C利用が最も多く、隣室にある控え室では昼食がとれるようになっており、利用率が高かった。また、相談内容別には、レポート添削が最も多く、授業の補助、修士論文の添削、投稿論文、研究計画、博士論文の添削などの順になっている。

3. 国際学生宿舎メンターサポート

新入生受け入れに際し、宿舎で生活していく上で困ったときの先輩メンターとして、同じ寮に居住する韓国、中国、タイ出身の大学院留学生3名にボランティアメンターになってもらい、寮内での生活面での支援体制を強化した。2007年度の国際学生宿舎のメンターは、中国は許太玲（M1）さん、韓国は朴エスター（M1）さん、タイはアート（D2）さん、2008年度は、中国は許太玲（M2）さん、韓国は朴エスター（M2）さん、タイはアート（D3）さんであった。相談内容については、近くの病院や買い物をするための店の紹介、通訳業務などがある。

4. 国際交流グループT E A

国際交流グループの活動については、2007年の運営は木下あゆみさん（文教育学部）が、2008年度は伊藤真和史さん（理学部）が代表となり、副代表やメンバーとともに活動を進めてくれた。詳しいことは本報告書中の2人の報告を参照されたい。第6回、第7回の留

学生と日本人学生の国際教育交流シンポジウム（交流合宿）は、彼らが中心になって活動しており、参加者は30名から40名程度である。大学における認知度も高くなり、新入留学生の友人形成のきっかけとなっている。これらの報告は、グローバル教育センターのHPに掲載されているとともに、センターに報告書があるので、参考にされたい。

また2007年度、2008年度、「国際交流を実践する学生のための交流会（Network of Cross-cultural Organizations略称NCO）」に4名から5名程度参加しており、全国の大学の国際交流団体が集まり、自分たちの活動を客観視できる機会を得ている。これについての報告は、グローバル教育センターのHPを参照されたい。

以上のように、留学生に関するピアサポート活動は、院生チューター、TEAの交流活動、国際学生宿舎のメンターサポートと担当教員との連携のもとで行われている。

【参考文献】

- お茶の水女子大学第6回国際教育交流シンポジウム報告書
- お茶の水女子大学第7回国際教育交流シンポジウム報告書
- お茶の水女子大学留学生相談室だより第11号
- お茶の水女子大学留学生相談室だより第12号
- お茶の水女子大学グローバル教育センター・ホームページ

2007年度 留学生相談室活動報告

チューター長 石 原 翠

(人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻 博士前期課程2年)

1. 日常支援活動

留学生相談室は、平日10時から17時まで大学院生チューター2名が勤務し、来室した留学生に様々な支援活動を行った。以下では、2007年度の利用状況と合わせて活動報告を行う。

(1) 開室日

前期 4月9日～8月10日 後期 8月27日～2月28日

※ 8月は夏季休暇のため、閉室予定であったが、留学生の開室希望の声が多かったため、8月1日～9月28日を特別開室日とした。また、特別開室日に限り、前年度同様、1人勤務日を設けた。

(2) 利用者

2007年度の1年間に相談室を利用した留学生数は、3,530人であった。所属別では、研究生(25%)が最も多く、修士の院生(23%)、学部生(18%)、博士の院生(10%)、日研生(6%)、交換留学生(6%)と続いた。学部生18%の所属学部は、文教育学部(16%)、生活科学部(1%)、理学部(1%)であった。留学生の学部所属状況を反映しているとも考えられるが、生活科学部、理学部の留学生に向けて相談室利用を呼びかけていくことが課題となった。

(3) サポート内容

相談室におけるサポートの中心となるのが、日本語添削活動である。2007年度も、授業のレポートから、修士論文、博士論文、投稿論文、研究計画、ゼミでのレジュメ、メール、手紙など幅広い添削活動が行われていた。長い論文の場合は、構想段階から、何度も足を運び、添削を受ける留学生の姿も多く見られた。

また、授業や、ゼミでのレジュメ発表のための発表練習・漢字の読みの確認、excelやwordでのグラフや表の作り方など、学業に関する幅広い内容の質問があり、留学生が気軽に質問できる場所として、相談室が機能していることがうかがえる。

パソコン利用に関しては、昨年同様利用者が多く、年間の相談室利用者のうち72%が、

パソコンを利用し、メール、レポート作成、インターネット閲覧などを行っていた。また、添削を受けた後に、パソコンで、レポートや論文を加筆・修正していく留学生の姿も多く見受けられた。

さらに、大学生活や日常生活面の相談活動も行われた。図書館などの学内施設や教室の場所について、履修登録や授業の参加の仕方、大学周辺や東京の買い物・生活事情など、実に幅広い相談があった。住居に関するトラブルなど、その場で対応できない内容の相談の場合、顧問の加賀美先生への相談や、学内の担当機関に問い合わせなどを行い、次につなげることを心がけた。また、他のチューターに、メーリングリストや連絡ノートを用いて相談し、皆で解決策を考える場合もあった。

また、留学生相談室の向かいには、留学生が飲食をしながら交流できるスペース「控え室」があるが、控え室の利用者も例年通り多く、昼休みには、毎日、多くの留学生でにぎわっていた。控え室のパソコンを利用する留学生も多く、気軽に安心して時間を過ごし、留学生同士の交流ができる場所として控え室が機能していたと考えられる。

2. 留学生関連行事

4月11日 前期留学生オリエンテーション

※ 相談室の紹介、及びオリエンテーション終了後のキャンパスツアーを行った。

6月13日 歌舞伎観賞会

※ チューター1名が引率

9月20日、21日 留学生見学旅行（日光）

※ チューター3名が引率

10月10日 後期留学生オリエンテーション

※ 前期同様、相談室紹介とキャンパスツアーの実施

3. 活動運営の様子

チューター長（前期：原、後期：石原）を含む3名の運営メンバーによって、全体の運営活動が行われた。また、前年度と同様にチューター全員が、会計・備品、統計、室内美化などの係を受け持ち、協力しながら運営を行った。さらに、「チューター日誌」に、各チューターが勤務時間や勤務内容を記録することで、次の担当のチューターが、状況を把握でき、活動を引き継げるように工夫した。係の活動についての伝達事項や、活動の中で気になったこと、疑問に思ったことについては、「連絡ノート」や、「メーリングリスト」を利用し、自由に意見交換できるようにした。

また、前期・後期各3名の留学生チューターが勤務を行った。留学生チューターの存在

は、留学生への母語での対応や、相談室を利用する留学生の立場に立った意見の発信など、留学生運営にとって貴重な存在であった。

さらに、チューターの学年や、所属・専攻が多岐に渡っていることも、留学生の幅広いニーズに対応する上で、多いに役立っている。

2008年度 留学生相談室活動報告

チューター長 長 戸 裕 香
(比較社会文化学専攻博士前期課程1年)

1. 相談室利用状況

(1) 利用者

2008年度の留学生相談室の利用者統計(2008年4月から12月末日現在まで)を見ると、利用者は述べ3,109名であった。所属別の内訳で最も多いのは研究生866名(28%)であり、次いで学部生640名(21%)、修士課程の学生587名(19%)、博士課程の学生301名(10%)、日研生296名(10%)、交換留学生219名(7%)と続く。

また、修士・博士課程の学生を合わせると、888名(29%)となり、大学院生、研究生、学部生の幅広い層での利用状況が窺える。

(2) サポート内容

相談室で主に行っているサポートは、パソコン利用の補助や日本語添削である。その他にも、DVD視聴サービスや図書の貸し出し、大学生活や日常生活における相談活動なども行っている。

パソコンの利用者は、2008年12月末日の時点で述べ2,134名と、全体の69%を占め、特に研究生や学部生が多く利用している。相談室のパソコンは、留学生が優先的に利用できる上に、インターネットへの接続が可能である点、プリントアウトが可能である点、プリントアウトしたものをその場でチューターに日本語添削してもらうことが可能である点、WordやExcelの使い方が分からないときにその場でチューターに聞くことが可能である点などが、よく利用されている理由として挙げられるであろう。

日本語添削の利用も高く、特に修士課程の学生が多く利用している。日本語添削は、授業のレジュメやレポート、卒業論文、修士論文、博士論文、投稿論文、研究計画書など、利用者のニーズに合わせ、幅広く行われている。利用者も添削するチューターも、同じ学生という立場のため、気軽に利用しやすいのではないかと考えられる。加えて、まだ新しい生活に慣れていない研究生や日研生などの場合、大学生活や日常生活における疑問や悩みなどは、何度も相談室を訪れ、添削活動を通して顔見知りとなり自然と出されることもあり、学生同士ならではのピアサポートの場としての相談室の意義も大きいと考えられる。内容によって、相談を受けたチューターがその場で対応できない場合は、学内の担当機関を紹介するなどのサポートを行った。

さらに、相談室の向かいには控え室があるが、ここではパソコンの利用や飲食ができるため、特に昼休みに利用する学部生や研究生が多く、留学生同士の交流や情報交換の場となっている。控え室には、チューターへの意見箱も設置しており、利用者の声を相談室の運営に反映することができた。

また、相談室や控え室の掲示板にグローバル教育センターの行事のお知らせを掲示することによって、間接的な情報提供にも役立っていると思われる。

2. 留学生関連行事

4月9日 前期留学生オリエンテーション

*相談室の紹介、及び、オリエンテーション終了後に留学生をグループに分け、図書館、情報処理センター、保健管理センター、国際交流チーム、グローバル教育センターなど、大学生活をする上で主要な建物を中心に案内するキャンパスツアーを行った。

6月11日 歌舞伎鑑賞会

*チューター2名が引率した。

8月1～7日、9月8～30日 夏期休業中の開室

*相談室利用者やチューターに対して事前調査を行い、開室日程を調整し、通常の二人勤務を行った。休業中であるため利用者は少ないながらも、相談室のパソコンや日本語添削の利用や控え室の利用が見られた。事前調査の中で、休業中に相談室が利用できないのは不安との声も聞かれ、利用者にとって相談室が役立っていること、安心して利用できる場であることが窺えた。

9月18～19日 留学生見学旅行（函館）

*チューター3名が引率した。



10月8日 後期留学生オリエンテーション

*前期同様、相談室の紹介及びキャンパスツアーを行った。

3. 運営の様子

相談室の運営は、チューター長を含む3名の運営メンバーを中心に行われた。また、その他のチューターもそれぞれ、室内美化・図書、会計・備品、統計、相談室便りといった係を受け持ち、係リーダーを中心に協力しながら相談室の運営に携わった。

チューター同士の連絡は、連絡ノートやメーリングリストを通して行われた。連絡ノートには、チューターがそれぞれの勤務の中で気づいたことや相談、意見、情報提供の手段として頻繁に活用された。また、新しく決まったルールなどチューター全員で共有すべきことは、メーリングリストにも投稿された。

院生チューターが中心となって運営するという事は、利用者と同じ学生という立場であることから、良い点ばかりではなく難しい点も含まれる。しかし、そのことをチューター自身が理解しておくことによって、チューターと利用者双方が気持ちよく利用できるための、より親密な、充実したサポートが実現できるものと思われる。

2007年度前期 T E A活動報告書

第5期T E A代表 木 下 あゆみ

(文教育学部グローバル文化学環)

1. 活動内容 (2007年4月～2007年9月)

4月6日 入学式

留学生と交流する側であり、T E Aを長期的に運営する将来の担い手として、日本人学生の確保にも力を入れる必要があると考えた。前年度の反省から、今年は入学式でチラシを配り、興味を持ってくれた新入生にT E Aの紹介・説明を簡単にした。

4月11日 留学生オリエンテーション・留学生歓迎会 (ウェルカムパーティー)

留学生オリエンテーション終了後、ケーキやお菓子を用意し、留学生歓迎パーティーを開いた。今回は、留学生と日本人学生とがより仲良くなりやすいように、アイスブレーキングとしてゲームを行った。また、留学生を歓迎する側の人数が例年少なかったことを反省し、今回は日本人学生や既にT E Aに所属している留学生を誘うことにも力を入れ、ここ数回のウェルカムパーティーのときよりも多い人数 (15名程度) で留学生を歓迎することができた。

4月24日～27日 東京近郊おすすめスポット紹介 (全4回)

ランチタイムを利用して、T E A部屋で日本人学生がお台場・群馬・上野・横浜中華街の紹介を行った。

5月11日 新入生歓迎会 (池袋)

ここ数回よりも参加人数が多く、15名程度で池袋のお店で食事会を行った。留学生と日本人学生と均等な割合で、久しぶりに賑やかな歓迎会を開くことができた。

5月16日 2年生・3年生ミーティング【第1回】

2006年2月末に第2回N C Oに参加したことを契機に、T E Aの問題点として「引き継ぎの欠如」や「組織基盤の脆弱さ」を痛感した。それを打開すべく、例年より早くから2年生と3年生との間で引き継ぎを視野に入れた話し合いを行い、共に改善策を模索した。

5月23日～6月8日 文化交流会（全7回）

毎年恒例の行事で、ランチタイムの時間にT E A部屋で行った。今年は、日本人学生が北海道・鹿児島・浅草、留学生が韓国・リトアニア・中国の紹介を行った。

6月22日 2年生・3年生ミーティング【第2回】

6月28日 2年生・3年生ミーティング【第3回】

7月30日 送別会（池袋）

毎年数人でのさみしい送別会であったが、今回は25名程度の参加があり、大変賑やかな送別会を行うことができた。このうち、留学生を送る側の日本人学生は半数以上を占めたため、留学生にとっては最後の良い思い出になったことと思う。

8月2日 引き継ぎ

加賀美先生の研究室にて、正式な引き継ぎを行った。

*その他、毎日お昼休みに共通講義棟3号館102教室を開放し、日本人学生と留学生とが共に食事をしながら会話を楽しむ、T E Aのメイン活動は、今期も続けて行った。

2. これまでの反省から新たに行った「引き継ぎ」

T E Aは2008年9月に設立6年目を迎えた。どの団体においても、設立後5年経ったころは過渡期であり、団体の方向性について再考しなければいけない時期である。T E Aの場合は2006年度前期から2007年度前期がまさにこの過渡期であったと考えられる。

これまでT E Aでは正式な引き継ぎを行っていなかった。その理由としては、設立後4年間は、加賀美先生と一緒にT E Aを作った初期メンバーがT E Aに在籍していたことが挙げられる。引き継ぎをしなくても、T E Aを作った本人たちがT E Aを運営する中心にいたか、あるいは先輩としてT E Aに在籍していたため、T E Aの理念や運営の仕方についての意識・理解が暗黙のうちにメンバーの大多数に伝わっていたようである。

そのT E Aが大切にしている大原則とは、「①学年・国籍を問わず、やりたい人が②やりたいときに③やりたいことを④みんなで楽しく仲良くやる」というものである。もちろん、一般的には、これだけでは団体の運営は成り立たないとも考えられる。しかし、留学生の意見も日本人学生の意見も全てを幅広く取り入れ、みんなで話し合ってみんなでやりたいことを自由にやることができる柔軟性というのは、T E Aの特徴であるだけでなく、おそらく他団体にはない長所でもあるだろう。

しかし、2006年度頃から、初期メンバーが完全に抜けたことと引き継ぎの欠如が重なり、

TEAへの意識や理解がメンバー内で薄れていく傾向にあり、この特徴はプラスに働かなくなってしまう。2006年度前期から2007年度前期にかけて、TEAの運営に携わっていた数人のメンバーからこのような意見が出た結果、正式な引き継ぎの重要性を初めて認識することとなった。初期メンバーがいなくなってしまうからこそ、今後は正式な引き継ぎを行うことで、TEAの理念や先輩方の思いをきちんと後輩に伝え、より良いTEAにしていってもらうことが目的である。執行学年である3年生と次期を担う2年生との間で数回に渡りミーティングが行われ、その打開策を共に模索し、文書として引き継ぎの記録を残したことが今期のTEAとこれまでのTEAとの最大の相違点であろう。今期は、これまでの問題点に気づき、その打開策を提示するところまでしかできなかったため、打開策の実践については次期以降に期待したい。

3. 活動の様子と課題

以上、主にTEAの運営について述べてきた。TEAに所属する留学生は大多数が短期留学生（1年間）であるため、運営の中心に携わるのは日本人学生であることが多い。しかし、TEAがピアサポートの一環として留学生を支援する側面も持つ以上、まず初めに留学生の立場や思いを理解し、留学生のニーズにあった企画を行うことは大切なことであろう。また、国際交流団体の側面も備えている以上、どちらかが受け身になるのではなく、留学生と日本人学生とが相互に主体的に関わり合う場も必要であろう。そのため、今期も文化交流会を開催し、留学生と日本人学生とが共に出身地の紹介を行った。また、4月から新たにTEAに入った留学生の提案により、東京近郊おすすめスポットの紹介を今年初めて行った。このように、留学生が発表をしたり、留学生が企画したりできるTEAの雰囲気は、今後も守り続けてほしいものである。

一方、TEAを運営する上では、その中心となる日本人学生をきちんと確保することも重要なことである。実際、ここ数年は日本人学生が各学年2、3人しかいなく、サポートする側の人員不足は以前から関係者から問題点として挙げられていた。そのため、今期は日本人学生に向けてTEAを紹介することにもより一層力を入れた。その結果、新入生が10名近く新たにメンバーとして加わった。また、7月の送別会の参加人数は20名ほどと、ここ数回の送別会のうち最も賑やかな雰囲気の中で留学生を送ることができた。

今後の課題としては、上記に記載した引き継ぎ以外には、①昼休みの交流のみだと学内に留まってしまい深い付き合いに発展するのは難しいので、学外や昼休み以外でのイベントも増やすこと、②留学生が運営の中心にもっと積極的に関わられるよう、留学生・日本人学生合同のミーティングを定期的に関くことなどが挙げられる。

4. 代表を終えての感想

加賀美先生から以前いただいたお言葉で、私が心に留めているものがある。

「日本人は人に迷惑をかけることを嫌うけれど、迷惑をかけたくない、というのは実は人と関わらないということ。迷惑をかけないで人と付き合っていくのは無理。TEAのメンバーは、迷惑をかけあう存在であってほしい」

多くの日本人が「人に迷惑をかけないように」と親や先生に言われて育ってきたことだろう。それは一理あるし、日本人にとっては美德でもあるのかもしれない。私も、人に迷惑はかけないようにしようと、そればかり考えて今まで生きてきた。しかし、代表を終えて、どうかTEAでは、「迷惑をかけたくないから……」と意見を言うのを渋る前に、何でもいいから、どんなことでも、いつでも、遠慮なくメンバーに話して、国籍・学年関係なく、互いに迷惑をかけ合って、何度でも対立して、気がすむまで話し合っしてほしいと思うようになった。TEAは、留学生を支援する一方、留学生と交流する側面も備えている。同じ学生同士、お互い迷惑をかけ合える存在になってこそ、真の友情が育まれるし、そうやって初めて、良い国際交流／ピアサポートを行えた、と言えるのだと思う。

第六期（2007年9月～2008年8月）T E A活動報告書

伊 藤 真和吏

（理学部3年）

10月10日 留学生オリエンテーション・留学生歓迎会（ウェルカムパーティ）

春から来た留学生の歓迎会を理学部三号館のラウンジで行った。

11月上旬 4月からの留学生と日本人学生による文化紹介

（お茶の水女子大学紹介、お茶大周辺、銀座、上野、池袋、渋谷紹介）

このときに行った文化紹介は各国の紹介ではなく、お茶大周辺や東京案内、寮への便利な行き方を中心に行った。新しく来た留学生の手助けになればと考えたのだが、宣伝方法も分からず、なかなか人が集まらなかった。

11月10・11日 徽音祭にて模擬店を出店（韓国、チヂミ）

副代表の脇川友恵を中心に準備していった。事前にT E A部屋で試食会を行い、韓国の留学生に作り方を教えてもらったりして、味を磨いた。当日は天気が良くなかったが、大盛況だった。事前準備から協力して行うことで留学生と日本人学生、それぞれの距離が短くなってきたように感じた。

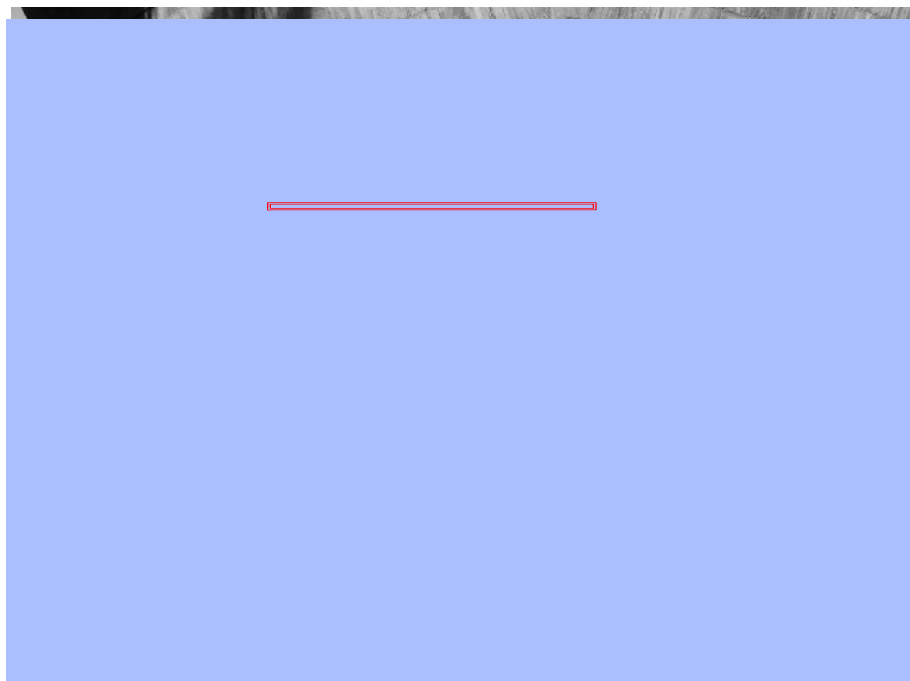


2007年徽音祭での活動

11月17・18日 第6回国際教育交流シンポジウム開催

(八王子セミナーハウス、参加者38人)

今回は3年生の神野可奈子と長澤美波と伊藤真和史の3人で実行委員となった。早い段階から準備をしたり、仕事を分担したりできた。人数も日本人学生21人、留学生17人と多く集まり、賑やかなシンポジウムとなった。グループ別討論会のテーマは、「感情表現」、「メディアを通してみる文化」、「サブカルチャー」、「女性問題」、「結婚」の5つである。活発な討論が行われた。



第6回国際教育交流シンポジウム 2007. 11. 10～11

八王子セミナーハウス

1月 お散歩（汐留、参加者10人弱）

木村礼さんの企画で汐留にお散歩に出かけた。行った場所は浜離宮庭園と日本テレビである。抹茶のソフトクリームもいただき、楽しい企画であった。

2月中旬 4年生と留学生を送る会（参加者20人程度）

池袋のお店にて、4年生と春からの留学生の送別会を行った。

2月25・26日 NCO（国際交流を实践する学生のための交流会）＜静岡御殿場、参加者4人＞に参加

NCOはNetwork of Cross-cultural Organizationの略で、TEAからは伊藤真和吏、脇川友恵、木村礼、平井智野の4人で参加した。日本全国から100人以上の学生が集まり、活発な情報交換、討論を行った。参加したメンバーも大きな刺激を受けた。

団体を紹介する一分間CMでは賞をもらうことができた。

NCOの後、参加者で集まり、TEAの活動にどう還元していくか話し合った。その後のTEAのミーティングでその結果を伝えた。

3月 お花見（東大HOMEと合同、参加者7人程度）

東京大学本郷キャンパスでHOMEと合同でお花見を行った。当日はあいにくの雨の天気だったが良い交流の機会となった。

4月8日 新入生サークルオリエンテーションにて日本人学生の新勧活動

今までTEAではあまり力を入れていなかった日本人学生の新勧活動を行った。具体的にはサークル紹介誌「春が来た」にTEAを載せたり、入学式やオリエンテーション時にチラシを配ったり、留学生控室をお借りして新勧活動を行った。

4月9日 留学生オリエンテーション、留学生歓迎会（ウェルカムパーティ）

秋から来た留学生の歓迎会を行った。

5月下旬～6月 留学生と日本人学生による文化紹介（参加者15人程度）

（ポーランド、クロアチア、イギリス、韓国、北海道）

留学生は自分の出身国の、日本人学生は自分の出身地域の紹介を行った。とても興味深い、新鮮な発見の多い文化紹介であった。

7月上旬 図書館の展示“国際色豊かなお茶大生”に参加

留学生にアンケート、写真に協力してもらい、図書館の展示に参加した。各国の有名料理やお茶大の良いところを書いてもらい興味深いアンケート結果だった。

8月1日 留学生を送る会

池袋にて昨年の秋からの留学生の送別会を行った。留学生一人一人にTEAでの活動の感想を話してもらったが、お茶大に来てTEAに入って良かったと言ってもらえたことが何よりうれしかった。

<感想>

私が代表をしている間、常に意識していたことは、発展し続けるTEAであってほしいということだった。そのためにどうすれば良いのかは試行錯誤の連続だったように思う。日本人学生の勧誘に力を入れたのはじめからTEAに参加しているのとそうではないのだとはどうしても肌で感じるものが異なるし、TEAがどのような団体であるのか知ってもらうには時間がかかると感じていたからだ。ただサークルではないため、活動がかえって難しい点があった。

NCO（国際交流を実践する学生のための交流会）を経てTEA内でも少し組織化をしようと試みた。そのために月2回程度のミーティングを行った。これも試行錯誤で最初はお昼ではなく放課後に行ってみたり、メンバーの線引きがあいまいなのでコアメンバー（主に行事を決めるメンバー）とそうでないメンバーを分けようとも試みた。しかしながら、放課後のミーティングは集まれる人が限られ、またメンバーを線引きすることによってかえって参加しにくくなることもあり、うまくはいかなかった。また、係りの分担も代表、副代表の他、会計や書記、WEBなどセクションを作った。個人の負担があった方が責任を感じ、行動できるのではないかと考えたからなのだが、うまくいったセクションもあればそうでないセクションもあり、それらは次期以降の課題である。加えて、引き継ぎは明確に日にちを決めて仕事内容、前期の活動の反省点を文書化し、行った。これは良い点だったと思う。

今回、この報告書を作成するにあたって些か資料が少ないように感じた。企画を行ったらその概要と人数、企画のために作った書類は残しておくべきだと感じた。

TEAの良い点はその年その年によってカラーが変わる点だが、執行が変わるごとにいまままで積み上げられたことが忘れられてしまうことはとても惜しいことだと感じていた。積み上げや引き継ぎの努力は行ったつもりだ。課題としては留学生をTEAのメンバーの中に取り込み、主体的に発言、行動してもらうには、まだ努力が必要ということだ。そして、まだまだ知名度が低いのでまずは大学内でのTEAの知名度アップ、大学外への情報発信、他大学、他団体との交流を進められるのではないかと思う。

加賀美先生の支援、教務補佐さんの支援に心から感謝する。大学との関わりが深いのはTEAの強みであるが、それに頼ってしまうことも多く、どこまで自立するのも課題だ。

TEAの潜在的可能性はとても大きい。個々の交流を大事にしつつ、それを基盤として益々発展するTEAを願う。

第1回

ピアサポートのための研修と交流会

「第1回ピアサポート研修と交流会」の企画と概要

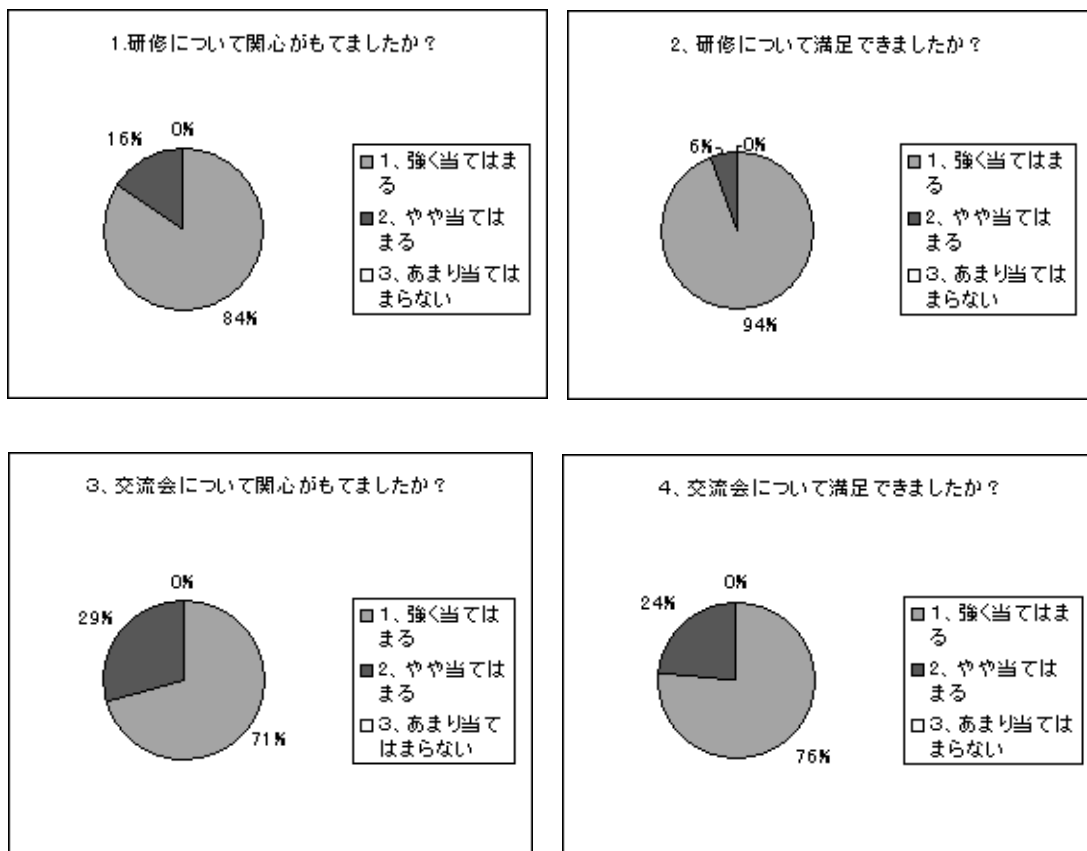
准教授 加賀美 常美代

概要

2008年2月14日、お茶の水女子大学本館306教室で、「第1回ピアサポート研修会」がピアサポートプログラム連絡会議と学生支援室との主催で行われた（別添のポスター参照）。研修会では「ゲームを通して学ぶ」というテーマで、瀬田すみ恵氏（株式会社チームビルディングジャパン）によるゲームの研修会が行なわれた。学生、教員、職員が参加して2つの種類のゲームが実施された。その後、「学生と教員の交流会」がグループごとに行なわれた。

参加者は30名、アンケートの回答者は19名で、以下のとおりである。

（アンケート結果の集計と図表の作成は、学生支援チームの長澤豊さんによる。）



感想

研 修	交 流 会
人が知り合って仲良くなっていく課程を2時間弱ででき、普段の生活にも活かせると思った。	
今までのピアサポートの交流会にはない形態で、とても楽しかったです。実際に動きがあったことがよかったですと思います。	
普段できない経験でとても有意義な時間を過ごさせて頂きました。ありがとうございました。楽しかったです。	
楽しく学ぶことができ、先生や事務の方々や、他学部の人たちと交流できた。自分の専門の留学生支援にも役立てたいと思います。	少し時間が足りなかった。先生に質問しなかったです。でも研修が終わった後なので、先生方と打ちとけて話せました。
遅れてきてしまったため、全体像をつかめず残念でした。すみません。後から来たメンバーがすぐに解けこみやすい雰囲気、この研修のすごさを感じました。	各テーブルに先生か学生支援チームの方が事務の方が付いた方がよかったです。話の盛り上がりには差が見られた気がします。最後、全体でふり返りできてよかったです。
いろいろな立場の方と交流でき楽しかったです。	学部の方にお茶大のピアサポートシステムについて聞くことができ参考になった。
	先輩と話す機会ができてよかった。
ためになった。チームワークはすばらしいと思った。	たのしかった。
初めは不安でしたがとても楽しめました。グループの方との距離が縮まった気がしました。	グループが異なった人とも話ができて更に交流が広がりよかったです。
日常に役立つアイデア・アクティビティを学ぶことができとてもよかった。ファシリテーターという仕事についても知ることができ勉強になった。	おいしいケーキ、お茶をいただき幸せだった。欲を言えばもっといろいろな人と話せるとよかった。
想像していた内容と違ってとても楽しく、良かった。日常にぜひ活かしていけたらと思います。	学部生だけでなく、教員や院生と話すことができよかったです。ケーキも美味しかったです。ありがとうございました。

研 修	交 流 会
卒論にもこれからのピアサポート活動にもすぐ応用できる内容でした。ファシリテーターのあり方についても学びました。	事務や院の方と親しくお話できて勉強になりました。
たのしむことができた。そして、ファシリテーターのやくわり、ゲームの効果について学ぶことができた。	具体的にどのように日常でいかせるかということについて考えることができた。
とても楽しかったです。	おしゃべりができてよかったですと思います。
全て楽しかったです。ありがとうございました。	全て楽しかったです。ありがとうございました。
勉強になりました。研修もすごく楽しくできましたし。初めての人と仲良くなれる良い機会だったと思います。	ケーキうれしかったです（笑）なかなかないチャンスなので良いと思います。
知らない方がほとんどの中での研修だったのですが、とても親しみやすい雰囲気、楽しく過ごすことが出来ました。このような研修を受けたのは初めてで、とてもよい経験になりました。ありがとうございました。	時間の都合で参加できませんでした。すみません・・・。
初めて話す人同士を仲の良いムードにもっていく段階の踏み方が体験できた。自分自身がシャイなタイプなのにとても楽しめたのでピアサポの新生会でも使いたいと思った。	
いろんな発見があっっておもしろかった。初めての人たちと、こんなに短時間で仲良くなれて驚いた。	

「ピアサポートのための講演会とシンポジウム」のアンケート

今日のご講演、シンポジウムにご参加くださりありがとうございました。以下に簡単な質問にお答えくださいますようお願いいたします。これは無記名で、統計的に集計いたしますので、個人的にご迷惑をおかけいたすことは一切ありません。また、この結果は、今後の学生支援室の企画などに生かしていきたいと存じますので、是非ご協力のほどお願いいたします。

学生支援室 ピアサポート連絡会議

1. 次の質問に当てはまる場所に○をつけてください。

(1) 講演について

関心が持てた --- () 強く当てはまる---- () やや当てはまる--- () あまりあてはまらない
満足できた -- () 強く当てはまる---- () やや当てはまる--- () あまりあてはまらない

(2) シンポジウムについて

関心が持てた --- () 強く当てはまる---- () やや当てはまる--- () あまりあてはまらない
満足できた -- () 強く当てはまる---- () やや当てはまる--- () あまりあてはまらない

2. 感想を自由に書いてください。

(講演)

(シンポジウム)

3. 現在の所属先について

学部生 ①文教育学部 ②理学部 ③生活科学部 学年 () 年

大学院 専攻 () M1 M2 D1 D2 D3 研究生 その他

お茶の水女子大学
ピアサポートのための
研修と交流会

主催 :ピアサポートプログラム連絡会議
お茶の水女子大学学生支援室

ピアサポート連絡会議では、学生のピアサポート活動のスキル向上を目指して、
ゲームを通して学ぶ研修を企画しましたので、ぜひ参加ください。

- 日時 :2008年2月14日(木) 13:00～16:00
- 場所 :大学本館306室

～スケジュール～

開会あいさつ

三浦徹 教育機構長

- セミナー 13:00-15:00

「ゲームを通して学ぶ」

講師 瀬田すみ恵氏

株式会社チームビルディングジャパン

- 交流会 15:00-16:00

学生と教員の交流会

学生:ピアサポーター、その他学生交流やボランティアに関心のある方

教員:ピアサポート連絡会議メンバー、学生支援室員、ピアサポート委員、ピアサポートアドバイザーほか、ピアサポートに関心のある先生方

閉会あいさつ・コメント

御船美智子 学生支援室長

企画進行 加賀美常美代

参加費:無料。どなたでも参加できます。

問い合わせ: 学生支援チーム03-5978-2646



〈編集後記〉

ピアサポート・プログラム報告書第3号をお届けします。

小規模大学である本学は、伝統的に学生同士、また教員－学生間の距離が小さく、そのスケールメリットを活かした相互交流が盛んでした。具体的な活動や取り組みは、それぞれの学部や学科、対象ごとに多様ですが、それらを「ピアサポート」という共通理念のもとに統合し、本学のよき伝統としていっそう根付かせていきたいという思いが、本事業の出発点にありました。平成16年度より予算措置もなされて全学的な取り組みとなり、そこから数えて5年が経過しました。

改めて振り返ると、各学科・学部等の取り組みは、ほぼルーティン化し、マンネリ化したといえなくもありません。しかし、当たり前のことですが、年々歳々、学生たちは入れ替わっているのです。新入生として、戸惑いと不安の日々を過ごした学生たちも、いつのまにか3、4年生になり、かつて自分たちが上級生から受けたアドバイスやサポートのなかでほんとうに役立った、心強く思えたものを選び分けながら、新入生をサポートしている自分に気づきます。こうして、一見すると同じことをしているように見えながら、実は内容的にはどんどん進化し、洗練されているのだと確信しています。

教育をめぐる環境も社会情勢もめまぐるしく変わる昨今ですが、人と人の絆、そして、これをより確かなものにするサポートの精神は変わらないはずです。小さな大学の小さな試みですが、これからもこの小さな灯が絶えることのないよう、見守っていききたいと念じています。

(藤崎宏子)

お茶の水女子大学 ピアサポート・プログラム報告書－第3号－

発行年月日 2009年3月31日

発行 お茶の水女子大学ピアサポートプログラム連絡会議

(メンバー：戒能民江、加賀美常美代、安成英樹、藤崎宏子、吉田裕亮)

住所 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

編集 藤崎宏子

印刷製本 よしみ工産(株)

